
橙。 ~ The Sun ~

相沢たかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

橙。〜The Sun〜

【Nコード】

N0757I

【作者名】

相沢たかし

【あらすじ】

西暦2218年、地球、惑星連合首都王麟。“太陽”の二つ名を持つ探偵「橙」は政府高官を狙った爆弾テロの主犯を追っていた。目標を追い詰めた橙だったが、すんでの所で取り逃がしてしまい、その瞬間から「橙」とテログループ「ソード」の戦いが始まったのだった。姉弟の絆が撃ち出す近未来ガンアクション。

Mercenary・1

Prologue

失うことを知っている。

閃光と、爆風と。

弾けた血潮と、声と。

ここは阿鼻。

彼女はそれを、知っている。

1

……西暦2218年、地球、惑星連合首都「王麟」、AM3:28。

2

がこっ！！

華やかな中心街からほんの少し外れた通りを、電磁二輪車がかっ飛ばしていた。どこかをぶつけてしまったか、バランスを崩しかけて一瞬よろめく。

二輪と言ってもタイヤが付いているわけではない。全体の格好そのものは何世紀も前の自動二輪と変わらないが、タイヤ——と呼ばれていたらしい——の代わりに円錐形の推進器が縦になって二つ取り付けられていた。流線型のボディは紫。赤のテールランプが灯っ

ている。見るからに毒々しいそれに跨った男は、二輪車の主翼を目一杯たたんで狭い路地を疾走していた。

「惑星連合」、それは地球すべての国が一つの組合としてまとまった組織のことである。いまや前世紀の遺物とさえ評されるこの組織は、かつて、資源の枯渇しかけた地球を乗りきるために創成された。その後の技術革新や人口の減少によって現在ではあまり用を成さないのだが、今のところ解体される見込みはない。そして、その連合の首都が、この街、王麟であった。

かの都市は常に盛況。夜のない座だ。そこは、圧倒的な富豪たちの社交の場であるとともに、通り一本移るたびに全く違う顔を持つ場所でもある。華やかに楽しんでいる市民のほんの目と鼻の先で、先刻述べたような命懸けの鬼ごっこが続いている。

その男は逃げ続けていた。名はトッド・リヴァクト。連合政府から多額の賞金の懸けられた爆弾魔だ。

まず、体格はよい。髪は剃りあげられて、黒に近い茶の肌が露出している。黒のスーツ、同じく黒色のゴーグルを着け、行く手を見据えている。

「多額の賞金」と申し上げたが、数日前までの彼は、誰にも手を出されないような小額の賞金首だった。しかし、その後の数時間が、瞬く間に彼を超・大物へと変貌させる。

元来、トッドは小心者だ。その“事件”まで彼は、比較的警備の薄い、場末の飲み屋のようなものしか標的としなかった。それでも死人は出るのだし犯罪者には違いなかったが、昨今そんな人間は珍しくもない。そういった治安の悪い区画では飲み屋の経営者が殺人鬼だったりするものだから、「見破れなかった方がマヌケだったのさ」と嘲笑されることになる。

彼が有名になったのは、彼の仕掛けた爆弾が、政府の高官を同時に、しかも複数人殺害してしまったからである。嚴重にガードされ

た王麟中枢でどんな手を使つたかは定かでないものの、彼は裏の世界で一躍英雄の座についた。

そんなこんなで金を手に入れたトッドは、身なりを整え、先祖代々の富豪であるかのような気取りようで都市の中心部へと向かった。通常であれば、彼のような人間が中心部に足を踏み入れることはできない。天文学的に広がった経済格差が搾取する側とされる側に軋轢を生むのは当然のことで、治安維持のためには貧富による住み分けを行うしかなかったのだ。従つて、その検問を行う者たちの収入は“外側”の人間に比すべくもないほど大きな金額ではあつたのだが、彼らがガードしている人々に比べればこれまた“比すべくもない”のだった。人の欲にはきりが無い。検問官の彼らだつて“守られる側”になることを望んでいた。よつてここに、買収が成立する。金さえあれば、“聖域”に入ることができる、ということだ。

トッドの話に戻ろう。

大金持ちの中には殺された政府の人間に不満を持つ者達がいた。なにか利権絡みなのか、それとも、単に食べ物の嗜好が合わなかつただけなのか。彼らはトッドのテロを見た上で、彼に多額の金銭を与えていた。

大金持ちというのは常に金の使い道に困っている。彼らにとって、新しい車を買うのとトッドに寄付をするのは、全く同じ感覚だった。好きなアイドルにファンレターを送るのと似たようなものだろうか。ともかくもトッドは高級な夜を楽しもうと行動した。そして今は、それを後悔している。

連合の捜査官は無能ではない。彼らは金銭の流れを調べ、トッドがそれを使うタイミングを推し、網を張っていた。そして今日、彼を包囲した。彼の入つていった店の出入り口を押さえ、突入の機会を窺っていたのだ。

そのときトッドは店の女と話し込んでいて、それが突入のタイミングを遅らせ続けていた。

結果から言つて、確かに捜査官達は無能ではなかつたが、トッド

のしたたかさはそれを上回った。

長い間新しいお客が入ってこないのを不審に思ったトッドは、自分の危機を確信し、女に空いたグラスを持たせ、入り口近くにいるバーテンにおかわりを頼んだ。女は空のグラスをバーテンの元に持って行き、バーテンに渡した。その間にトッドはトイレに行ってしまった。柔らかい照明と上品な絨毯が、穏やかな時間を約束していた。

トッドが一人きりになったのを好機と判断した捜査官達は、彼がトイレに消えたのを見てすぐに突入した。

——その瞬間、バーテンの持っていた空のグラスが炸裂したのだ。トイレから戻ったトッドは風穴の開いた入り口から堂々と逃げ出した。残念ながら、裏口から入った捜査官達は間に合わなかった。

では、何故、彼は今こんなにも怯えているのだろうか？

連合政府直属の捜査官を出し抜き、本来なら鼻歌の一つも出るどころではないだろうか？

そう、彼の本当の不幸は、ここから始まったのである。

……余裕たつぷりに出てきたトッドだったが、時間はあまりなかった。何度も申し上げるが、捜査官達は無能ではないからである。辺りを見回して、彼は道端に停めてあった二輪の中から手持ちの偽造鍵が使えるようなのを探していた。

鍵の原理は何世紀立っても変わらない。どれだけ複雑になろうとも、いや複雑になればなるほど、製作者に油断が生じ、思わぬ隙を生んだりするもの。

たとえ指紋が必要でも、網膜が入用でも、そして今のように個人が一つだけ体に埋め込むIDタグが鍵であったとしても、やり方は決まっている。

ハンドルのすぐ下にあるパネルを手持ちのナイフでこじ開ける。無論、このナイフ、普通のものではない。いついかなるときもトッ

ドが手放さなかった点から見ても、その性能は推せる。やはり、相当の高級車には通用しないが獲物次第では……。

「よし、解除した」と。

彼は、ナイフでパネルを外し 中の基盤に偽造鍵をつなげて、機材の支配者となる。

起動した二輪は格納していた翼を広げ、トッドが跨るとゆっくり地面から浮いた。彼はスロットルを目一杯開けて裏路地へと消えていった。

彼を追うものは、今や、捜査機構だけではないというのに。

2

同時刻、爆発のあった通りの向かい側、掃除業者のワゴン型電磁四輪内。

その空間は、ディスプレイの光りを除いて真っ暗だった。

小柄な——まだ十台前半だろうか——男の子がディスプレイに目を向けている。薄くブルーを感じられる銀の髪がうなじをちょうど覆っていて、前髪の方は目にかかるくらいの長さだった。画面を見るのに邪魔になるのか、少年は左手でそれをかきあげていた。

「LよりSへ。目標が二輪を奪取したよ。追尾装置は順調に稼働中。直ちに追跡を開始して——オーヴァー」

透き通った、聞き取りやすい声だ。感情は抑制されて、事実のみを伝えていた。

「了解。じゃあ、ちょっと働いてきまーす……おーばあ」

相手の間の抜けた発音に少年は顔をしかめる。微かに、舌打ちした。

「ふざけてないでちゃんとやってね。センサーの圏外に出られたら手が打てなくなるんだから。オーヴァー」

画面を注視したまま、彼は口を尖らせる。いつもながら、仕事前の“彼女”には苛立ちを抑えられない。

「はいはい、気をつけます。そっちこそ、ちゃんとご飯作つていてよ。仕事明けつて、お腹すいてるんだから。以上、通信終わり！」

通信機の表示が青から赤に変わる。“Off Line”の赤字がコンソールにも点滅。

電磁四輪の主は深くため息をついた。

「いつも勝手なんだから……」

Lと名乗った男の子はまだ画面を見つめている。トッドを表すTのマークと姉のSがどんどん遠ざかっていく。心配そうに見つめながら、彼は、クリーナで慎重に画面を拭いた。暫くそのままだったが、さつと手を伸ばして男の子は電源を切った。姉のことなら心配いらない。おちゃらけてはいるが、あれは場慣れしている証拠なのだ。

彼女を送りだした後、ディスプレイを拭うのは半ば習慣になっている。

それで何かが変わるわけでもないのだが、彼には姉の行く手を清めているように感じられていたし、実際それは、ほとんど信仰に近いものになっていた。

なんといっても、彼女は、彼にとって唯一の家族なのだから。

男の子は、姉を送り出した後の虚脱感をいつものように感じてはいたが、あまり長く浸っているわけにもいかなかった。姉が帰ってきたときに食事ができていないと、姉よりも、自分の身の安全を心配しなければならなくなる。

「今日はご馳走だな」

運転しながら口を開く。

（手元の材料で、できるだけ豪華なものを作ってあげよう。それとも姉さん疲れてるだろうから最初は何か軽いものの方がいいか……）

もう、姉の心配などしていなかった。

（だって姉さんは——“Sun”の二つ名を持つ凄腕の探偵なんだから！）

橙。〈The Sun〉Mercenary・1

Episode 1: The Sun

トッドが走り去るのをビルの屋上から見下ろしている少女がいた。身長は160センチ代後半、年は16、7歳といったところ。オレンジを基調とし、体の線がはつきり出るほどに一体化しているスーツには、緑のラインが入っていた。

ちようど、胸部中央に緑の円がある。

それは鈍く光りを発していて、スーツ全体に走っているラインはそこから出ていた。

「さあて、やりますか」

先程の通信でSと呼ばれた少女が呟く。

彼女の名は橙^{だいたい}。王麟でも音に聞こえた探偵である。身辺警護から素行調査までギャラさえ折り合えば何でも請け負う、ただし、殺しはやらない。

少女がこれからやることは とても安全と言えることではなかったし、率直になれば、彼女にしても好ましいものではなかった。けれど、それではあんまり気詰まりだから、橙は彼女なりにスリルを楽しむことにしていた。

トッドを尾行するのには、スーツに搭載されている光学迷彩を使って街角に潜んでいた方がよかつたろう。にもかかわらず地上30階の屋上で待機していたのは、ひとえに彼女の趣味の問題である。心配性な弟には何度もやめるように言われたが、彼女は聞き入れなかった。

強い風が吹きつける。

やや緑がかったゴーグルはトッドを望遠表示しており、また同時に彼の居場所を地図の上に示していた。

茶の髪が、なびく。それは、外向きに跳ねた、肩の高さで切りそろえられたもの。

橙は一度、髪を伸ばしてみたいと思ったことがある。だが、結局は仕事に差し支えることがわかり、以来伸ばしていない。人並みのお洒落を彼女は随分前にあきらめていた。

驚いたことに、そうしてみると、それまで見えなかったものが見えてくるようになった。自分専用で用意される装備品の数々——そのどれもがそれぞれに機能美を蓄えていたのだ。

今のスーツは3世代目。開発当初は使い物にならなかったが、たゆまぬ向上への歩みの結果、こうして実戦に耐えられるものが仕上がってきている。

「これより、状況を開始。主翼開放、滑空モードへ。以降のスーツ拳動を記録」

胸の緑円が小さく輝いた。スーツは音声認識での操作だ。緑円はスーツの制御を担っている。

小さく音がして、背中の中が開く。

普段は折りたたんでいるオレンジの翼——有機的なデザインではなく、直線で構成された羽であるのに、それを広げた様はどこか天使のようだった。

少女は頭から飛び降りた。主翼は彼女の意味通りに制御されて、目的の高度につく頃には姿勢を水平に変えていた。背中中の推進器が起動してトッドを猛追する。

ふと、道行く人が顔を上げて彼女を見た。オレンジのスーツが空中を疾駆していく。その外見と彼女の性格、そして護衛や凶悪犯の捕縛を行い、暗闇に光りを当てることから、いつしか彼女は“The Sun”と呼ばれるようになっていた。

ものの数分で彼女はトッドに追いついていた。職務のために特化されたスーツにあつては、市販の電磁二輪など勝負にならない。少女は相対速度を合わせ、トッドの肩を軽く叩く。ぎよつとして振り向いた男に、橙は微笑んでみせた。さりげなく車の正面に回って滞空する。

「爆弾魔のトッド・リヴァクトさんですね。依頼により、あなたを捕縛します。大人しく従って頂けますか？」

電磁二輪の挙動がぶれる。左の主翼が裏道の壁を掠めた。

「お前は……橙、“太陽”か!？」

既に顔面蒼白である。

「はい、そういう者です」

いまだに笑顔の少女に、トッドは凍りつく。

見間違えるはずもない。

オレンジの翼、緑のゴーグル、そして何より……この笑顔。

彼女に宿る推進器の光りが後光に思えた。ハンドルを持つ手が、震える。

正面には丁字路。突き当たりの壁が近づく。

「“太陽”の笑顔を見たら諦める」

先達からの忠告が心に走った。

スロットルを戻して、ブレーキを引く。減速して、主翼をたたむ

——そうしてしまった場合の未来をトッドは想像した。

目の前の少女とはまた別な人物が、頭に浮かび——、

分かれ道はもうすぐ。停めるか、曲がるか。

コンマ数秒。

自分が護送中に殺されることを、彼は悟った。

思い浮かんだ“あの男”に、間違いなく、始末される。

捕まれば、確実な死。逃げれば、不確定な死。

ブレーキに掛けた指は痺れたまま、スロットルが放たれた。

「わわっ！」

轢かれそうになるのを少女は危うくかわす。彼女は向きを変えながら、トッドが何かをばら撒くのを見た。瞬時に推進器を噴かして、橙は高度を上げる。足下で強烈な閃光が生まれ、抉れた地面だけが残っていた。

空中でホバリングしながら、橙はバイザアを見つめる。追尾装置は律儀に働いてトッドの行き先を告げている。

爆弾魔捕縛の依頼を受けたとき、彼女と弟（主に弟！）の結論は“トッドの背後に黒幕がいる”というものだった。トッドの、それまでの小物っぷりからすれば、特に議論の必要もない。

彼を捕まえるのはいつでもできる。橙は、トッドの上役を狙っていた。

ただし、実の所今回の依頼はトッドの捕縛であって、そこまでの必要はどこにもなかった。タダ働きは彼らの最も嫌うところ。そうでありながら、姉弟は独断で行動している。この事情には、少しばかり時間を遡らねばならない。

数日前の事件――、つまり、トッドの爆弾が炸裂し、多くの人間が亡くなった事件では、橙もまた要人の護衛についていた。あの日、約束したホテルに家族連れで保護対象が現れたとき、すぐさま彼女は、別れることを提案した。契約では“一人”で来ることになっていた。

5歳の長男が見慣れない花束を持って来て、橙は直感する。体が、動いていた。

保護対象である父親の足を払い、自分の背後に伏せさせる。

スーツに付いている防御障壁を発動させ、体の正面で両手を交叉し……。

それが、精一杯だった。

彼女の前で花束は爆発。男の子が吹き飛ぶのを橙は見た。

振り向いて、父親の胸元を乱暴に掴む。そのまま担ぎ上げ、その場を離れる。およそ顧客を扱う態度ではなかったが、幸いにも保護

対象を殴り飛ばすようなことはせず、護衛任務を達成した。報酬は、満額に合わせて違約料。家族を連れてきたのは、減点対象だ。

喜ぶべきボーナスつきの仕事具合だったのに、彼女は荒れた。研究所に戻り、スーツを脱いだ更衣室でロッカーを殴る。

拳から血が滴って。

体を覆うものは、何もない。

殴り続けた。

どれだけの間そうしていたか……彼女はシャワーを浴びた。拳に湯が沁み、屈辱と悲憤が湧く。このままにしておくつもりは毛頭なかった。

その怒りは、しかし、亡くなった男の子によるものではない。

閃光の瞬間、バイザアが絞った光量の世界で、彼女には、その子が、確かに弟に見えた。

それは、明らかな幻。

弟は、安全な後方に控えている。

けれどその虚像は、彼女に動かし難い怒りを与えたのだ。

三日と経たないうちに父親からの依頼が届き、橙と弟は準備を始めた。そうしてトッドを探し、今に至る。

トッドとその上役を見つけたとき、彼らを冷静に捕縛できる自信が橙にはなかった。

今回はトッドを殺してもいい。そういう任務だ。

しかし……弟には、見せたくない。

今頃あの子はご飯だろうか、と橙は思う。

ため息を一つ、瞬きを二つ。

光点が、止まった。

両手の痙攣をトッドは感じていた。橙を振り切ってから随分になる。“あの男”の所まで逃げ延びることだけに意識を集中していた。次の角を曲がれば、あとは長い直線だけ。荒っぽいコーナリングに車体が跳ねる。行く先の廃倉庫群が視界の中で大きくなるにつれ、トッドは気をよくしていった。それは、連邦の捜査官だけでなしにあの“太陽”をすら出し抜けたことに対する高揚だった。体の震えは歓喜のそれに変わり、大声で彼は笑った。二輪を隠した後、トッドは大威張りで倉庫に入る。彼の背後、ごみだらけの路地で、犬がうなっていた。

トッドが二輪から降りたとき、橙は、既に彼の後ろにいた。彼女のスーツはド派手なカラーリングであったし、背中为推进器が発する輝きも人目を引くものだったけれど、同時にこうした隠密性も実装していた。

旧世紀に光学迷彩と名づけられたその技術は、スーツ表面に周囲の色彩を映し、その世界に主を溶け込ませる。正に、ピコテクノロジイの結晶だった。この技術を装備しているのは今のところ自分だけだ、と橙は思っている。究極の隠密兵装、“光学迷彩”。その機能を生かし、こうした尾行をしやすくするために、普段の彼女は、意識して派手に立ち回っていた。

橙は、トッドがカードキーを使うのを見ていた。廃倉庫の巨大な扉が、左右にスライドしていく。

王麟では、その中心から離れていくにつれ、建物が過去へと遷移する。発展した中心部と、捨て去られた郊外。遺跡のような静けさで、ここには過去の遺物が鎮座している。中央で、カードキーはもはや死語だ。

トッドが中に入っていく。

橙は、彼が扉から離れたのを見計らって、入り口へと向かった。スーツはステルスモードに切り替えられており、推進器の駆動音は最小限に抑えられている。

足音のしないよう、橙は軽くホバリングをかけた。扉がゆっくり戻ろうとしている。扉の安全装置が働いてもう一度開いてしまったら、トッドに気づかれてしまう。額から汗が降りていった。

閉まりかける扉を半身になってやり過ごす。トッドの後を追った。追尾装置は、彼の使いそうな複数の二輪車に前もって仕込んでおいたものだった。だから、今度トッドを見失えば追跡は困難である。幸い、扉の向こうはがらんどつで、しっかりと彼を見ることができた。

トッドが部屋の中央で立ち止まる。集音率を最大にして、橙はコンテナの影に隠れた。同時にステルスモードを解き、一旦スーツをシャットダウンして完全に音を絶つ。ステルスモードは、スーツ自体に必要なエネルギーだけでなく、自分の存在を消すためにも——例えば推進器の音を消すとか——それを消費した。そのため、背中の小型ジェネレータでは出力が足りず、長時間連続して使うと行動不能になってしまうのである。

橙は今、集音のみにエネルギーをまわしていた。ゴーグルの表示を見て残存エネルギーを確認する。出力不足なジェネレータを補う目的で、彼女の背中とその間にはバッテリーが装備されていた。ここにエネルギーをためておくことで、燃費の悪いスーツを誤魔化している。

のろのろと増えていくゲージを見つめて橙は舌打ちする。そしてトッドともう一人の男との会話に耳を傾けた。

5

倉庫は荒れ果てていた。目につくものの大半が、黒く沈んで埃に

まみれていた。

その巨大な空洞のあちこちに赤茶く錆びたコンテナが転がされている。ランダムな配置であつたが部屋の中央部分に大きなスペースがあり、すすけた、巨大な鉄箱が一つ、ぽつんと置かれていた。

その上に男が一人、目を伏して座っている。端の部分に腰をかけ、両足を投げ出した姿勢。

“男”と評しはしたが、その実少年なのかもしれない。暗い廃屋の中では判然としない。名は、シルヴァ「コールドウエル。あのテロを計画し、トッドに爆弾を作らせた張本人である。

淀んだ、ワインレッドの瞳。言い換えれば、それは血の色だ。放射状に広がった長髪は、闇に浮き立つ“黒”を宿している。

トッドが現れたことに気づいたのか、彼はそちらを見た。色褪せた黒のコートがシルヴァの全身を包んでいた。

「アポ無しには会わないと言つたはずだ。その様子だと、追われて来たのか？」

ぎろり、と血色の瞳が向く。

背中に氷槍を突きつけられている、とトッドは感じた。自分は何を得意になつていたのかと、今さらながら悔いていた。されど、黙っているわけにもいかない。

「ああ、今しがた“太陽”追われてよ。一度とつ捕まつたんだが、うまく撒いてやつたんだ。どうだい、俺もやるもんだろ？ そのときの“太陽”の慌てぶりと言つたら……」

最後まで、続けられなかった。シルヴァがコンテナを殴り、強烈な金属音が部屋の中で反響した。

「馬鹿者！……派手な行動は慎めと言つたはずだ。お前は俺に従つて爆弾を作つていさえすればいい」

一瞬、目を泳がせていたトッドではあつたが、そこまで聞いたところで睨み返した。頭の足りない男として認識されているのが面白くない。

「聞き捨てならねえなあ……。この俺の爆弾のお陰で“ソード”の

名を相当高められたんだろう？　そのトッド様がいまだに下請け人なのはこういうことですかね」

そう言い終わったとき、トッドはもう、シルヴァを見てはいられなかった。

ソードの名が出た辺りから、シルヴァの瞳が赤く輝き出したのだ。光る瞳のまま、彼はコンテナから飛び降りた。二歩ほどトッドに近づいて口を開く。

「お前、何様のつもりだ？　貴様のような虫けらが幹部に！？　想像するだにおぞましい。組織はごみの掃き溜めではない！」

トッドは声を上げられなかった。あまつさえ何かに締めつけられているような気さえた。これがシルヴァの本性か、と腰を抜かしていた。

「まして、“ソード”の名はお前如きが口にして良いものではない。腕を買ったつもりだったが、貴様の代わりなど幾らでもいる。やはり、低俗な者と関わるべきではなかったな」

シルヴァは懷に手を入れる。その右手がそつと銃を取り出した。艶のない、黒の銃口がトッドを向く。

「恐怖で声も出せんか……。私としても残念だよ。もう少し使える男と踏んでいたからな。身の程をわきまえて　ただただ仕事を果たしていれば、こんなことにはならなかったのだ。愚かなお前の管理をたやすいと思えばこその人選だったが……。これも私の不徳か。ふふふ、これから死ぬ人間を見ると妙に饒舌になつてしまふ……。悪い癖だとわかつてはいるんだが、なかなか直らない。」

さて、無駄話はこれくらいにしようか」

シルヴァが引き金に指を掛けた。

6

シルヴァの銃が弾を吐くことはなかった。黒の凶器は手を離れ、

空中を舞っていた。

ジジツという音とともにオレンジ色の少女が現れる——橙だった。捕縛用の鎖がスーツの右手首の辺りから伸びて、トッドを縛り上げている。先ほど彼が声をあげられなかったのは何も恐怖だけのせいではない。

橙は、腰の背側からナイフを抜いてシルヴァの首筋に当てていた。切れ味を高めるための機構が働いて、刃が青白く発光する。

「シルヴァさん……でしたっけ？ 抵抗しないで下さいね、私は血を見るのが嫌だから」

シルヴァがトッドを睨む。彼の背後に、跳ね上げられた銃が着地した。

「トッド、お前は本当に救えない奴だ。“太陽”は撒いたんじゃないのか？ まさかここまで酷い男だったとは……自分を呪ってやりたくなる」

「黙ってて！ 殺されたいの？」

橙の声色が変わる。ナイフを近づける。

「君に私は殺せんよ。少なくとも組織のことを訊くまでは、な。」

しかしトッド、お前には感謝しなくては。久々に楽しい相手に出会えた」

シルヴァは全く動じない。その表情はむしろ、明るい。

「よく……喋りますね」

橙はゲージに目をやる。

シルヴァの言うように、ナイフがはったりだったのは事実だ。すぐに鎖を使えばよかったのだが、ステルスモードの連続使用でスーツに限界がきていた。ナイフを使ったのはエネルギー回復の時間稼ぎだったのだ。

「いつもお喋りなわけじゃないさ。私の悪癖はもう聞いたらろう？」

はっとして、橙は男に当身を入れようとした。

シルヴァが、叫ぶ。

呼応するかのように、周囲のコンテナが炸裂した。灰のようなも

のが舞い上がり、轟音が響き渡る。

やられた、と橙は思った。そんな仕込は感知していなかったのだ。シルヴァが……いない。慌てて橙は辺りを見回す。スーツのセンサが背を向けて走っていくシルヴァを捉えた。

「待ちなさい！」

追跡しようと翼を展開したとき、天井が爆発した。トッドは、動けない。このままでは大事な手がかりを失うばかりか、任務まで失敗してしまう。この仕事はあくまでトッドの捕縛が目的だ。

「——ッ」

左腰のリボルヴァを抜いた。一瞬で弾を入れ替えてシルヴァを撃つ。

弾丸は目標を追い越し、破裂して透明な粉末を撒き散らした。弾が外れたものと思ったのか、シルヴァはそのまま消えた。

鎖を巻き上げ、トッドをぶら下げたまま、橙は飛んだ。推進器に全エネルギーを回して安全な場所まで退避する。

さっと振り向いて、橙はあの倉庫を望遠した。爆発のせいか埃が舞い上がっており、像がはっきりしない。

ややあつて煙が落ち着き、視界がクリアになったとき、あの場は更地と化していた。

橙は十五分ほどその場に留まり、スーツの回復を待つて帰投した。東の空が明け始めていた。

Episode 2: drop

1

帰還した後、ラボの一室で橙は開発主任と会っていた。

白衣の男がそうで、年は見たところ30代の後半。伸ばしっぱなしなばさばさの黒髪がむさ苦しい。

スーツのデザイナーである彼は、厚い黒縁の眼鏡をいらいと押し上げた。その眼鏡を見るたび、どこで買ったのだろう、と橙は不思議に思う。近頃では見かけない、随分古臭い意匠だ。

彼は、レンズの奥から鋭い視線を橙に浴びせ、感情を押し殺した声で言った。

「説明を求めろ」

彼——Dr・Jは、自分の機嫌が急降下していくのを観測していた。それというのも この生意気な小娘、橙のせいだ。彼女は「トッドの捕縛」という任務を果たしたものの、返却されたスーツは途方もなくぼろぼろになっていた。

まあ……それはよい。どうせ使い捨てのプロトタイプなのだから。彼が頭にきたのは帰投した直後の橙のせりふだ。

「使い物になりません！」

開口一番、怒鳴られた。なんでもジェネレータの出力に不満があるらしい。武器のエネルギー効率も悪すぎるのだそうだ。

使い物にならない？

あの洗練された装備が？

彼女の任務に噛み合うよう、完全に調整された、あのスーツが？
Jにとって橙の言葉は侮辱以外の何物でもなかった。それで、「説明を求めろ」、なのである。彼は普段から言葉の華やかな人物ではなかったが、それでも丁寧語くらいは使う。自分の開発したものに對する理不尽なクレームに彼は怒りを覚えた。前述の言葉遣いからも明らかのように、彼の理性は限界に近づいている。

スーツの力不足でシルヴァを取り逃がしたのだ、と橙は続けた。彼女の腹立ちも相当なもの。Jのことをわかっていて、敢えて喧嘩を売っている。

自分の能力に道具がついてこられない——そんな苛立ちを今まで彼女は隠したことがない。まして、それを開発したのがDr・Jであれば、なおのこと許せなかった。彼の能力を知っていればこそ、現状のスーツに苛立った。

とはいえ、互いの間が特別不仲というわけではない。むしろ、こういう二人だったからこそ、今までうまくやってこられたのだ。研究開発をする者同士が思ったことを話し合えなくては仕事にならない。……話し合い、というには少々過激な二人ではあるけれど。

「Dr・J、言いたいことは山ほどありますけど、今日はもう帰ります。明日、またお話ししましょう」

橙の癪癢は収まったようだが、言いたいことだけ言い散らかして出て行くとしてしている。いい度胸だ。

「わかった。また、明日」

答えて、Jは彼女が出て行くのを見ていた。下手に引き止めて取っ組み合いの喧嘩になっではいけない。今月はすでに三回もやっているし、その度にかかる部屋の修理代で二人ともクビになりそうだった。

ここは“Military And Medical 社”の研究開発部。何事も、結果が全て。そんな組織の中で、橙は新装備のモニタをやっている。彼女の探偵業（本質的には何でも屋だが）はその実戦テストの一環であり、同時に、MM社の広告塔でもある。「通称、M-Square社、か。Mad and Mad company の間違いじゃないかな」

作り付けの椅子を蹴っ飛ばそうとしていたJだったが、自分のジュークに疲れた笑いを浮かべた。これでたばこの一本も吸えば、気分は正常に戻るはず。昨今、最早たばこは“煙草”ではなかったのだが、Jは、昔風の煙のであるヤツを好んでいた。

自分の机に戻り、回収したスーツの緑円を機械に入れる。ロードを待つ間に煙草に火を点け、吸った。苛立ちが消え、思考がスムーズに流れ始める。

橙は決して因縁をつけたりしない。もちろん、自分もそうだ。どれだけ激しいやり取りをしても、未だかつて、彼女を疑ったことはない。

電子音が微かに鳴って、ディスプレイにログが表示された。煙草

を消して、捨てる。

さあ、仕事だ。

2

いつも通りの、ロッカールームへの足取り。

「に会った橙は、ぶつけた感情の分だけはすっきりしたものの、まだまだ気持ちが悪かった。不快の組成は、気分によるものが半分、汚れた体によるものが半分。自宅に戻る前に、さっぱりシャワーを浴びておきたい。最後の爆発のせいもあって、今回は、特に髪が埃まみれになっていた。このままでは帰れない。」

修理代がまだ出ないのか、橙のロッカールームは凹んだままだった。今日の失敗が胸にちくつと来たが、終わったことでくよくよしなない、というのが、彼女のポリシイの一つである。というより、いちいち気にしていたらこんな仕事はやってられない。

右の拳が少し痛む。どうにも治りが遅い。

「ま、すぐに捕まえてあげるわ」

独り言ちて、その疼きに、空いた手で触れた。天井から湯が落ち、浴びせられた埃が流れていく。

彼女にはシルヴァを捕まえる当てがあった。

あの、最後にはなった弾丸、あれから出た粉末は敵を標識するためのものである。極小の追尾装置といったところ。“光り”に頼めばシルヴァの居場所を突き止めてくれるだろう、と彼女は考える。

“光り”とは、コード“L”……橙の、弟の名前だ。

彼は機械に強い。

それはスーツのOS開発に参加しているくらいで、橙の要求をいつも形にしてくれる。彼の力なくしてこの装備の完成はなかったろう。

明日のカンファレンスには光りにも参加してもらわなくては、と

橙は思った。今回の任務ではつきりしたが、現行の装備には重大な欠点がある。こんな燃費の悪いスーツは使っていられない。

いつしか湯は止まって、温風に変わっていた。体を乾かした後、着替える。

自身のキャラクタに反して、私服姿の橙は、スカートをはくことが多かった。今日のは地が空色で、油絵のようなひまわりが点在している。丈は短め。上にはショッキングピンクのＴシャツを合わせていて、目を引く。夏はもうすぐ終わるというのに、王麟は暑かった。かなり、蒸す。

依頼達成による橙の収入は大したものだったが、彼女にはあまり使い道がなかった。遊ぶ暇なんてないし、従って交友関係もない。収入の管理は光りに任せっぱなしだけれど、橙の個人口座には毎月びつくりするような金額が入金されている。いつも最前線に立っている姉が少しでも贅沢できるように弟は気を遣っているらしかった。そんな状態だったから、口座のお金を使ってあげた方が弟も満足するはずだし、自分にしただって気晴らしになる。使い道を悩んだ末に橙の選んだ答えは服飾だった。それも最新のではなく、古くて、かつ状態のよいものを買集めるようになったのだ。最初は随分騙されたが、最近では相当の目利きになったし、コレクションもかなりのものである。光りも古い文化は好みだったから、この趣味には賛成してくれた。彼の服もよく買うのだけれど、毎回嬉しそうにしている。

エレベータに乗って地下駐車場に降りる。いつもの場所に停めてある愛車を見て、橙はにんまりした。苦労して手に入れたランボルギーニ、これまたビンテージの逸品だ。

1987年に製作されたプロトタイプで、内装や内部機構には随分手を入れたが、外見は殆どそのまま残した。橙にそんな技術はないから、拝み倒して、弟にお願いしたのだ。

車を起動した。橙はM-Square社の研究所を出て自宅へと

向かう。

ジェネレータに呼吸を合わせてシフトチェンジ。時刻は午前7時を回っていた。

長い橋を渡つてすぐの小高い丘——そこに、品よい住宅が群立している。まるで丘の上だけ時間が止まっているかのように、建物は古いものばかりだ。異質なものを感じるとすれば、その国籍が一樣でないということだろう。日本家屋あり、西洋建築あり。要するに好事家たちの住んでいる区画だ。“群立”と書いたが、一軒一軒の敷地は相当に広い。例えば、住んでいる日本家屋から石造りのお城が見えたりしたら、興醒めだろう。

それらの中に一際高いマンションがある。外装は赤レンガだったが、もちろん外見だけのもので、骨格はしっかりとしている。その二十階と二十一階、そして屋上（プール付きだ！）が、橙と光りの住処だった。

駐車場は地下にあつて、部屋へはそこにある専用エレベータからしか行けない。当然、エレベータの入り口には二十四時間、警備員が詰めていた。

そこに向かつて橙は車を進める。派手なオレンジの車体が陽光に輝いていた。橙は、この車の、やや角張った、無骨な所が好きだ。彼女曰く、「そこに魂を感じる」のだそうだ。この辺り、女の子の感性ではない。

橋はまだまだ続いている。暫くは、終わらない。早起きしたジョーガーが、汗びつしよりになつて歩道を走っていた。

彼女は十二歳でこの仕事を始めた。今年で、もう四年目である。光りは二つ下で十四歳。

まだ仕事を始めたばかりの頃、二人はよく相談して色々考えた。スーツの設計、新装備の開発、戦術の見直し……エトセトラ、エトセトラ。

任務で初めて人を殺したとき、橙は完全に塞ぎこんでしまった。自分が何のためにこの仕事をやっているのか、やらなければならな

いのかはわかっていたが、生理的な嫌悪感には逆らえなかった。光りの励ましと時間が傷を埋めてくれた。

次に人を殺したとき、橙は考えることを止めた。

どうせ仕事はやらねばならないし、そのためには命をとることもあるだろう。毎度考え込んでいたのではおかしくなってしまう。

その頃から、橙と光りの間に暗黙のルールが出来上がっていた。つまり――考えるのは光りの仕事、実際にやるのが橙の仕事、という明確な役割分担である。仕事に、彼女の口調が丁寧語になるのは自己暗示のようなものだ。任務達成のみに集中して硬い殻に閉じこもっていなければ、とても自我を保っていられる状況ではなかったのだ。

橙は、最前線に立てないことで弟が引け目を感じているのを知っている。光りは体が弱かった。が、それを抜きにしても、弟を現場に関わらせるつもりは全くなかった。汚れるのは自分だけでいい。光りは、まっすぐに生きていてくれなければ。それでなければ、自分自身が救われない。

結局、今回の任務も徹夜になってしまった。空腹で胃がきりきりする。眠気と苛立ちを振り切って運転に集中していた。

通勤ラッシュにはまだ早い。ランボルギーニはがら空きの道路を滑るように進んでいく。

光りは、起きているのだろうか？

3

二十階に上がると光りが玄関を開けて待っていた。

やはり、彼は寝ていたようだ。おでこが真っ赤になっていたし、

銀色の前髪もぺしゃんこになっている。

橙と弟の髪は全く異なっていた。二人ともしなやかな艶っぽい髪ではあつたけれど、橙は茶色で、光りは銀髪だった。

二人には両親の記憶がない。

最初の思い出にはもうDr・Jが登場している。彼曰く、二人揃ってスラムで行き倒れになっていた所を拾われたらしい。故に、彼らが本当の姉弟かどうか、と言われると彼女には自信がない。しかし、橙と光りは真実に興味はなかったし（橙の言葉を借りれば、真実でお腹は膨れない）、Dr・Jが言ったことだから信じていた。ひょっとして、二人は今の関係が崩れてしまうのを恐れているのかもしれない。

実際、こういう子ども達がM・Square社の施設には沢山いる。

彼らは、幼少の頃より苛烈な訓練を受けて、橙のように新しい兵器の開発に参加する。訓練中に命を落とす子ども達も大勢いたが、スラムで捨てられた命にはIDタグがない。従って、彼らの存在を認めるものはどこにもないのだった。それは、彼らの死が社会的にカウントされないことを意味しており、訓練を乗り越えた者だけにタグが与えられた。この時代では、存在するためだけに金がいる。M・Square社は、その名の通り医療から兵器まで幅広く取り扱っていた。橙の所属する研究所はその一部である。

Dr・Jは光学迷彩研究のスペシャリストだ。

彼がデザインしたスーツは、殺しには向かない。しかし、犯人逮捕が目的である捜査官達には評判がよかった。いずれは連合政府の保安部に正式採用されるのだろうが、コストの問題があり、今のところ量産されてはいない。

研究所の中には強襲型の重武装スーツを開発している所もあるし、災害時の救急活動に適したものを取り扱っている部所もあって、M・Square社の規模はつまびらかではない。

一度自室に入り、普段着に着替えた橙はリビングに向かう。テーブルにはポットとサンドイッチが置いてあった。橙は、椅子に座ってポットから紅茶を注ぎ、カップは暖められていることに気づく。

彼女が仕事から戻ると、光りはいつも完璧に準備し、行動した。もう彼女がすっかり覚えてしまいうくらい、その、無駄のないプロセスは繰り返されていた。

玄関で橙を出迎える。

テーブルには紅茶と軽い食べ物が載っている。

彼女がそれを食べる間に彼は料理をする。

食事は、橙がいない間に下準備を終えているらしく、絶妙なタイミングで次々と出てくる……。

今回はたまたま寝惚けていたけれど、それはそれで可愛いと橙は思うのだ。無理して起きてきたらしい様子が健気ではないか。

今日は終日オフ。

橙は、休みの日にコーヒーを飲まない。

あの飲み物は確かに頭を冴えさせるけれど、休みの日くらいは穏やかに過ごしたかった。彼女は、何も、考えたくないのだ。

光りは光りで、仕事明けの姉に声をかけない。

今回は、“殺し”はなかった。

しかし、任務中に犠牲者が出た時の橙は完全に無気力になる。今だって、彼女は徹夜で任務をこなし、喋る気力もなさそうに見えた。家に帰った途端、二人きりになった途端、彼女は疲れを表に出す。光りは、それを解消するのが自分の務めだと思っていた。それはつまり、彼女は自分の前でしか油断できない、ということだから。

橙はいつも通りたくさん食べ、なんにも言わずに椅子に座ったまま眠った。彼女をベッドまで運んで上布団を掛けてあげるのも、また光りの仕事だった。

夕方遅くになって、橙は目を覚ました。ベッドの中で超絶にスロ―モーな半ロールを繰り返している。もう一度寝直そうという魂胆らしい。

だが、彼女はすぐに諦める。何故なら、お腹がすいているから。休日の橙がこれ以外の理由で起きてくることはまずない。

散漫な意識で彼女はリヴィングに行く。乱れきった髪と薄く開いた目でふらふらしていた。その様は、憑かれているようで恐ろしいぬーっという言葉がびつたりの感じで、隣室に橙は現れた。光りはテーブルに本を広げている。弟は流石に慣れたもの。彼女を見て驚きもしない。二人の対比がシユールだ。

光りは本を閉じ、立ち上がって彼女の傍に行く。姉がずっこけるのでは？ という心配だけは、今までずっと劣化しない。橙が引っ掛けて落としたりしないよう、読みかけの本をテーブル中央に置いた。

この時代、紙媒体は大変高価である。存在する本全てが稀覯本だった。端末で読むのも本に触れるのも、情報の価値は――つまり、中身だけを考えるなら――変わりない。けれども、この住居においてディスプレイで読むのは場の趣にふさわしくない、と二人は考えていた。故に、稀覯本に金銭をつぎ込むことへのためらいは、この姉弟には存在しなかった。

古いものに対して、彼らが、ある種病的なまでにこだわるのは、普段の仕事が近未来的なものに囲まれていて、そこで命懸けの緊張を感じているからかもしれない。仕事は仕事、休みは休み、両者を完全に分離することで、彼らは優秀に任務をこなしている。

まだ夢の中なのか、橙の瞼は半分ほどしか上がっていない。顔を洗っても、彼女の挙動は不審なままだった。ゆらゆらと動いて、自分の席にどすんと座った。少し遅れて光りも腰掛ける。テーブルを挟んで対面した姉を、彼は見ていた。

光りは、寝起きの橙を見ているのが好きだ。

飛行機のエンジンがゆっくり回り回したすように彼女の瞼が上がっ

ていき、そして瞬きも速くなっていく。普段からは想像もつかない
ぽーっとした表情から 明るい姉に変わっていく所が、夜明けに似
ていて面白かった。

姉がそこそこシャープになってきたのを見計らって光りは話しか
ける。

「おはよう」

橙がゆっくり口を開いて返事をする。

「おはよお」

まだ、60%。

「お腹すいた？」

光りが訊いた。橙はちよつと考えてから（言葉の理解に時間がか
かったようだ）、

「うん」

と言った。

光りは、紅茶を出しておいて、食事を作り始めた。夕食は一緒に
食べられそうである。

任務が続くとなかなか食事を共にする機会のない二人だ。前は
いつだったろう？ と思案しながら、光りは台所に向かった。

食事を終えた頃、ようやく橙は復調した。

「ねえ、光り。あんた明日病院よね」

はつきりした発音。寝起きの彼女とは別人のよう。訊かれた光り
はちよつと嫌な顔をした。

「うん、そうだよ。透析に行かないと」

光りは、腎臓が弱かった。

週に三回、一回あたり二、三時間はかかる。普通はもっと短い時
間で済むのだが、光りの腎臓は特別弱かった。橙は、早く人工腎臓
ができればいいのに、と常々思っている。他の人工臓器に比べ、人
工腎臓の研究は二十年も遅れているらしい。透析で生きていられる
のに、わざわざ人工腎臓を作る必要はない、と言われているからだ

った。

「じゃあ、明日はお姉ちゃんがごはん作るっか？」

橙が、真顔で恐ろしいことを提案する。光りは引きつった笑いを浮かべながら、限界ぎりぎりのスピードで思考していた。

人工透析を行った後、それを受けた人間は酷く疲労する。姉である彼女は心配して気を遣っているのだし、その点については光りにも異存はない。

問題は、彼女の腕だ。橙は、料理下手である。いや、そんな生やさしいものではない。彼女のは、別の意味で鳥肌の立つ料理。透析で抜いた毒を、きつと帳消しにするだろう。その偏差値は80を超える。

もちろん、光りは、料理の出来ない姉を責めるつもりはない。

橙がこんな仕事を続けなければならないのは、自分のせいだからだ。もつとゆとりがあれば、彼女だってきつと料理をする時間もあったらう。

光りの受けている透析は普通のものではない、とDr. Jは言った。ほんの一昔前なら光りはとくに死んでいたというのである。その最新鋭の医療設備にかかる費用は莫大で、普通の仕事をしていたのではとても払えるものではない。その援助を条件に、橙はこんな仕事を続けている。

ときどき、光りは窓から飛び降りてしまいたくなる。自分さえいなくなれば、と思ってしまうのだ。

それはそれとして――、光りは、外食する方向へ何とか話を持っていこうと努力し始めた。

5

午前中いっぱいを使ったカンファレンスで、トッド捕縛に関して

スーツに問題はなかった、とDr. Jは述べた。彼を一度逃がす必要はなく、また、シルヴァと交戦するのも想定外だった、というのである。橙としてもこれには反論できない。

しかしながら、燃費の悪さが目立ったことは事実だし、橙はモニタなのだから、いいデータが採れたとも言えた。Dr. Jはスーツの効率を見直すことを約束し、また、新しい動力源は開発中であると告げた。

午後から光りは透析だった。

橙は、シルヴァにつけた追尾装置を解析してもらいたかったのだが、彼の捕縛は任務でなかったためにカンファレンスが優先されてしまった。従って、情報は明日まで待たなければならない。ラボの人間に頼んだとしても、仕事でない以上、請け負ってはもらえないだろう。

そんなわけで、現場のスタッフである橙は、午後の時間を持て余していた。光りを病院まで送った後はやることがない。

M-Square社の病院は、研究部と同じ敷地にある。普通の人は研究部も病院の一部と誤っているだろう。実際、その建物に「研究部」であることを示す情報は一切ない。ある種の偽装なのかもしれないが、しかし、その真偽に橙は関心がなかった。彼女にとって大事なものは、光りが医療を受けられることだけだ。

病院から出て硬い地面を歩く。

空は快晴。

こんな日、橙は無性に飛びたくなる。

仕事も、弟も、自分のことさえも忘れて……ただ飛ぶためだけに飛びたくなる。

橙は、空を見上げたまま進んでいた。自分がどこへ行こうとしているのか、彼女にもわからなかった。見えているのは、感じているのは、空だけ。

自分がどこにいるのかも、知れない。目のはしで捉えたベンチで

寝た。

体は仰向け。動かない。

誰も気づかない自然さで、瞼が落ちた。

——飛んでいた。

オレンジのスーツを着て、とにかく上昇していた。

体が軽い。太陽まで行けそうだと彼女は感じていた。

最高に、愉快。

くるくるロールして、それでも方向は変えないで、ひたすら昇っていく。その高揚を彼女は味わい尽くそうとしていた。

その高さまで達したとき、太陽はもう、近づいてはこなかった。

橙は出力を上げて、武器を放り捨てて、まだ昇ろうとする。

——もっと前へ！ もっと高く！

進んでいく身体とは裏腹に、目的地は遠いまま。

熱っぽい体。悲鳴をあげている推進器。

そして、瞬間——もういいや、と彼女はつぶやく。出力をカット

して、ほんの少し、微笑む。遠いな、と口から漏れる。

僅かな、無重力。

急降下。

雲はまだ遠い。体は虚脱して、星の力に身を委ねる。

白い塊を突き抜け、眼前に地上が見えたとき、橙はくすくす笑い始めた。それは加速度を増して、苦しくなるくらい彼女は笑った。

——わかった。

自分は、太陽を目指して飛んだのじゃない。墜ちるために、空を蹴ったのだ。

地面が近い。この快感も、もう終わる。

高層ビルの脇を舐めるように墜ちていく。背中に広げた羽を、パージした。

もう何も、いらない。この時間を妨げるものは、何も。

背の低い建物の屋上が見える。惑星に束縛されて、橙は落下する。

あの屋上は、既に、遙か上。地面が彼女を待っている。
その、硬質な壁が、鼻先まで近づいて、
刹那。

ブラック・アウトした。

6

空は燃えていた。

眠りに落ちていた時間は橙には判断がつかず、背中に走る痛みが
邪魔をして起き上がるのが億劫だった。

仰向けた体で、夢を思い出す。

「墜ちるために、か」

光りを守りたくて、今の仕事をやっている。そのことに不満はな
い、はずだ。でも、あの夢はどこかで自分を投影しているのではな
いか、と思えた。

光りのために人を殺す、捕まえる——それは悪くない。すべて、
自分で決めた。が、深層のどこかで自分は疎ましく思っているのだ
はないか？ と橙は考えて……、嫌な気持ちが胸を満たしている。

（守って、守って、守って。それで、私の人生はどうなるの？）

終わりの見えない連鎖。しかし、その義務を自分の意思で断ち切
るわけにはいかない。

（光りは弟だ。私の矮小な欲の犠牲になんて……）

だからだろうか、自分は終わりを探している。自分が納得できる
理由で、この生をおしまいにできる瞬間を探している。

義務からの解放を、望んでいる。

それが、“墜ちる”ということ？

あの心地よさは、その開放感だったろうか？

迫る夕闇と自我の内側が重なっていく。気分が悪い。橙は起き上
がり、病院を目指した。いくらなんでも、治療は終わっているはず。

「光り、待ちくたびれてるかな……」

足を速めて、橙は進んだ。

その先、公園の出口のベンチに、誰かが座っているのが見える。そのまま通り過ぎようとしたとき、男が立ち上がって、橙も気づいた。

飛び退いて、戦闘態勢をとる。男はそのままだ。

（シルヴァーコールドウェル！）

「気付いてくれないかと心配した」

橙をじつと見つめる。敵意はないように察せられた。

「そんなに鈍くはないわ」ちらつと出口を見る。「どうしてここがわかった？」

探偵・橙とMM社のつながりはMM社のコマーシャルとして周知されてはいるものの、所在そのものは明らかにされていない。加えて、出撃・帰投時はつねにステルスモードだ。足の付く恐れもないのに……。

「あの爆弾で、おまえ、灰を被ったろう？ 同じことを俺も考えていた」

「同じ、って？」軽く首を傾げる。

「白々しい……私に何か付けたではないか」面倒そうに、シルヴァが言った。

「ばれてたのね」橙は小さく舌を出す。

（アレに気がつくなんて、こいつ、何者？）

あの追尾装置は完成して間もない。つまり、どこにも出回ってない、ということ。

「今日はデートのお誘いに来た。なかなか捕まえに来てくれないかな」シルヴァはニヤツとして続けた。「場所はおまえの機械に従えばいい。私は待っている」

橙は答えない。シルヴァは、いまだかつて出会ったことのないタイプだった。体が強張り、体温が下がっていくを感じる。

「できれば一人で来るといい。ダンスは二人でするものだ」シルヴァ

アは公園の奥へと体を向ける。

「待つて」

橙が言った。シルヴァは立ち止まる。橙に彼は背を向けていた。二人の長い影が平行に伸びている。

「なんで……殺したの？ あの人達が、なにをしたっていうの？」
以前の、テロのことだ。

「やりたくはなかった」

シルヴァが答えた。橙は右手で拳を作る。

「私が殺すのは、それだけの価値を持った者だけだ。例えば……」
振り向いた。「お前のような。つまり……そう、可能性を持つ者達だ。もともと、“ソード”はそんな標的を探し出すために組織した。資料漁りなんぞ、私の性に合わない」

橙はシルヴァの視線を感じていた。発せられた言葉がうまく理解できない。

「だが、もちろん例外もある」

シルヴァは、一昨日の夜と同じ黒のコートを着ていた。そのポケットに両手をつ込む。

「例外？」橙が訊いた。

「スポンサ」吐き捨てた。「“ソード”のメンバは私に心酔している。従って人件費はakaran。とはいえ、資金は必要だろう？ 金を貰っている以上、スポンサに逆らうわけにもいかんさ。そういう意味で、私とお前は似ているな」

「一緒にしないで！」

素晴らしい反応で、橙が切り返した。シルヴァは頷く。

「そう、厳密には私の方が、自由だ。殺したい、と思ったものを殺す。それは食欲に近い感覚だよ。必要で、不可欠だ……他になにか言いたいことは？」

二人の間に沈黙が降りてくる。橙は、この男に不思議な親近感と強烈な拒絶とを同時に感じていた。あるいは、極々わずかな羨望も。「それでは、また、会おう」

シルヴァは、くるっと背中を向ける。橙は、追えない。指一本、動かなかった。

男が見えなくなつて、急に汗が吹き出るのを彼女は感じた。生まれて初めて、彼女は「戦慄」を定義した。ついぞ味わったことのない息苦しさ、寒さを知覚している。

光りからの連絡が入るまで、橙は硬直し続けていた。

7

橙に連絡を入れたとき、光りは既に追尾装置の解析を終えていた。姉の自由行動を邪魔したくなかった彼は、彼女に連絡するのをよしとて、自分の透析が終わってからそれをこなしたのである。

所在は知れた。

だが、光りは、それを姉に伝えるべきか、と迷っていた。
言えば、彼女はそこへ行くだろう。

しかしそれは仕事ではない。装備だつて、ろくに使わせてはもらえない。つまり、彼女を死地へと送り込むことになる。

（シルヴァ＝コールドウエル……）

光りは昨日の映像を見ている。

橙を前にして、あれだけの態度をとれる人物はそう多くない。

（やっぱり、解析できなかったことにしておこうか）

光りは、橙がどうしてここまでこだわするのか、ぴんと来なかった。解析用のハードをシャットダウンして、部屋を出る。

無理をしたのはわかっていた。透析後は重力が凶暴になる。神経もうまくつながってない感じだった。

椅子に体を預けて目を閉じる。

逡巡。

姉の、信頼と安全を天秤にかける。

橙はまだ来ない。時間とともに、光りは暗く沈んでいくのであつ

た。

8

橙が戻って、彼らは食事をした。

幸いにも光りの努力は報われた。外食になったのだ。

何をどう食べたか、光りはよく覚えていない。味も、よくわからなかった。なんとなく噛んで、飲み込む——そんなルーティン・ワークだった。

二人とも、ぼろ布みたいに疲れきっていた。帰りの車には沈黙が居座った。

橙の様子がおかしいことに、光りは気づいていない。今のところ、彼は、自分の体で手一杯だ。日はとうに落ちて、世界は暗闇に満ちている。

ライトアップされた道をオレンジの愛車が滑っていき、
「結果は出た？」

前を見たまま、橙が言った。人差し指で二度、ハンドルを軽く叩く。

「……」

光りの、長い間。しかし、それは十分返答だった。

「出たのね」

橙はアクセルを緩め、車のスピードを落とした。ちらつと、弟の顔を見る。

「行くの？」 光りは前を向いたままだ。

「うん」

淀みない発声で橙が答えた。光りは目を閉じる。

「仕事じゃあないんだよ。バックアップはないし、スーツだって貸してもらえるかどうか……」

「私は、行くよ」

周りに他の車は見当たらなかった。世界には自分達二人だけ——

そんな幻想が橙によぎった。

大きく、光りは息を吸い、吐く。そして、橙に視線をぶつけた。

「なんで行くの？ なにが不満なの？ 姉さん、待ってる者の気持ち、考えたことある！？」

光りは激しく咳き込んだ。こんなに荒々しい弟は久しぶりだ、と橙は思っていた。

「姉さんの足かせのまま、なにも助けられないまま、姉さんが帰ってこないのが……怖いよ」

光りはぜえぜえと乱れて、普段の、高い、澄んだ声ではなくなっていた。言い終わってから俯いて、彼は静かになった。

アクセルが踏みつけられる。車体が激しく加速して、光りは体を引っ張られた。べた踏みのまま、橙は緩めない。

「……好かないの」橙が唇を噛む。

「え？」

加速がきつくて、光りは聞き損じた。シートに押し付けられて、苦しい。

「いけ好かないのよ！」

ヒステリックな声が車内に響いた。天井のコンソールに橙は手を伸ばす。車体の後部に翼が展開して、ダウンフォースが増していく。アクセルペダルは勝手に戻って半踏みの状態。スピードメータの上限も変わった。

隣の光りが口を開く前に、橙はアクセルを踏み込んでいた。

——世界が、糸を引く。

光りはほとんど戻してしまいそうだった。もう、首も動かせない。数秒もしないうちにアラームが鳴る。

前方に、障害物あり。

アクセルに負荷がかかって橙の足を押し戻す。

一度目の警告。

じわじわとスピードが落ちていく。

橙はシステムに精一杯抵抗して、アクセルを踏む。左手が、再び

コンソールに伸びる。

赤いカヴァのついたスイッチ。光りの付けた、リミッタだ。押しさえすれば、彼女を邪魔するものはもうない。

（誰か……私を自由にしてよ！）

どうすればいいか、橙は知っている。

人差し指でカヴァを外し、中のボタンを押し込む。

簡単な儀式。

それでもう、自由だ。

震える指が、最後の防壁を取り去ろうと蠢く。

——カチッ。

悔しそうな声を残して、カヴァが外れた。

「姉さん！」

光りが何か言っている。

（いけ好かないのは、シルヴァ？ それとも……光り？）

左手の先端が愛おしそうにスイッチを撫でる。別の生き物のようだ、と橙は思った。

（……わからない）

無限の、鈍い、鈍い時間が、流れていた。

爪が、そのでっぱりを押し込もうとする。

その、運命への挑戦は、確実に終止を選ぼうとして、しかし、完遂されることはなかった。

光りが、左手にしがみついていた。

橙の手を引き剥がして、彼はカヴァを閉じる。

速度は十分落ち、翼はもうない。

光りを見た橙の瞳は大きく見開かれていた。真っ青な光りがそこに映っている。

焦点が戻って、橙はブレーキを踏んだ。ウインカをきつて、車末端によせる。少し遅れて、ハザードを点灯した。

ハンドルに額を押し付けて、低く、小さく、彼女は息をしていた。「会ったの」その姿勢のまま、橙が言った。

光りは、何のことかわからなかった。こみ上げてくる吐き気を押さえ込んでいた。

「今日、シルヴァに会ったの」

顔だけ横にして、橙は光りを見た。前髪が乱れて、額に貼り付いていた。

「待つてるんだって。私と戦いたいつて、そう言われた」

光りは心臓が止まりそうになった。吐き気は吹き飛んでしまった。橙が……泣いている。

「光り。私、なにもできなかった。捕まえるって、決めてたのに。怖くて震えて……」

両眼から流れ落ちていったものが、幾筋か――、あっけない儚さで蒸発しては消えていく。

「私、“太陽”なのに、竦んで……。教えてよ、シルヴァの居場所。このままじゃ、私、自分の命を許せないよ」

涙は止まらない。

薄暗い車の中で、それだけが時を刻んでいた。

「明日で、いい？」

俯いて、光りが言った。

なにも返さずに、橙が頷く。

額がクラクションを押して、夜の路面に、まるで号砲のように響き渡った。

Episode 3 : Magnetic

1

午前10時。徹夜明けのDr. Jは深い満足感を味わっていた。以前閃いていたアイディアがとうとう日の目を見たのである。

……指向性磁場防壁。操者の意思と連動して局所的かつ強力な磁場を作り出す機構だ。難点は、やはり、燃費の悪さなのだが、それ

は試作品の宿命というもの。細かいことにこだわると、新しいものは生み出せなくなる。スーツのエネルギー効率については、当分の間、今まで通りにバッテリーのようなもので凌ぐことにしていた。

椅子に座ったまま大きく伸びをして、Ｊは天井を見つめている。結果的にシルヴァとの交戦は貴重なデータとなった。あれがなければ、Ｊも橙もスーツに欠点を見出すことがなかった——あるいは相当に遅れた——からだ。現在ラボではスーツの見直しが行われている。新しい課題を与えられてＪの部下達は活気づいていた。

４年の開発期間を経て橙のスーツは完成度を増したものの、それは同時に開発スピードの減衰をもたらした。課題が与えられることで新しい発想が生まれることもある。橙に怒鳴られてスーツを別な視点で見始めたとき、Dr・Ｊはある種の予感を感じだしていた。後頭部に何かが纏わり付いているような、落ち着かない気配が……。Ｊは、それが新たなインスピレーションの兆候だとわかつていたし、それが断続的に繰り返され、そして、会社受けするものを作り続けられたからこそ、今の地位がある。例えば、今日完成した磁場防壁のように。

その感覚を捕まえようと、Ｊは煙草に火をつけた。

——そんなわけで、このとき、Ｊは、会社のルールよりも研究を優先する状態にあったと言える。

五本目の煙草が終わり、橙と光りが部屋に入ってきた。

「お願いがあります、Dr・Ｊ」

光りが声をかけたが、Ｊは天井を見たままだった。

「あちゃー、トリップしてるよ……」

橙が小声で言った。光りが、キツと姉を睨む。聞こえたらどうするんだよ、と。

「大丈夫よ、こうなったら何にも気づきやしないんだから」
橙はそう言って、Dr・Ｊの背後に回る。

「ちょ、姉さん、どうする気!？」

なんとなく橙の行動が知れて、光りは動転した。Ｊの両肩を掴むと、橙は、彼を思いつき揺さぶった。

「戻ってきなさい、Dr・Ｊ! 急いでるんです、私!」

彼女の奮闘の甲斐あって、三秒ほどで彼は戻ってきた。もういい、というように片手を挙げて、言う。

「部屋に入るときはノックくらいしたまえ。それと、今、私がどういう状態だったか、君なら理解できたはずだが」

Ｊは燃え尽きた煙草を捨てて、橙に向き直った。

「普段なら、待つ。でも今は……さつきも言っただけ、私、急いでるんです」

悪びれた様子は全く見せず、橙はまくし立てる。

Ｊはゆつくりと眼鏡を外した。目を閉じ、右手で眼鏡を丁寧にテーブルの上に置き、逆の手指で眉間を圧迫する。橙の、一度決めたことへの執着やまっすぐさというのには抗いがたい。そのことを、彼は、ここにいる誰よりも深く理解していた。

Ｊは、彼女を見る。レンズはなくとも、焦点は合っていた。

「一番左の保管庫を開きなさい」

「え?」表情を無くす。

「シルヴァと戦うのだろう?」

橙は、完全に拍子抜けした。光りも呆然としている。

「それは試作型だ。いいデータを採ってきなさい」

テーブル上の怪しげな丸眼鏡が、一際危険に光った。Ｊは少し、微笑んでいた。

「了解っ!」

大きく、一礼。

“スイッチ”の入ったDr・Ｊに彼女は慣れている。彼が冷静になる前にスーツを持ち出そうと、彼女は保管庫に駆け寄った。

「そう慌てずとも、更衣室に送っておく」

Ｊがコンソールに触れ、保管庫の置かれていた床が開いて、白い、

円柱状の物体が滑り込んで消えた。すぐにもスーツを手に入れようと、橙は、部屋の出口へ走っていく。

思い出したように出口で立ち止まって、振り向きざま、

「ありがとう！」

と叫んだ。返事をする間もなく、彼女の姿が見えなくなる。

嵐が終わって、部屋には光りとDr・Jだけが残っていた。

「じゃあ、僕は指揮車に行きますから」

自分の仕事を果たすべく、光りは部屋を出ようとした。

「待ちなさい」

背中に声をかけられて、振り向く。

「君は、戦いたいのか？」

光りは眉根を寄せて、俯いた。

「ホント言つと、僕はどうでもいいんです。姉さえ、無事なら……」

「だが、無事ですみそうにはない。しかも、困ったことに橙の決意は固いときている」

光りは顔を上げて、Dr・Jを見た。彼が何を言いたいのか、知れなかった。

「君に見せたいものがある。少し、時間を頂きたい」

コンソールのランプが赤く点滅する。橙が更衣室に着いたらしい。その端末を呼び出して、Jは彼女に連絡した。

「橙、行動の許可をもらうから、1時間ほど待ってはくれないかい？」

気持ち悪いくらい優しい声で、Jが言った。自分の両腕に鳥肌が立つのを光りは感じていた。

「……わかった」

やや間があつて、橙は了承した。万が一許可が出なくても、スーツさえあれば何とかなる、と彼女は思ったのだ。

Jは長く息を吐く。端末を閉じて、言う。

「こっちだ」

部屋の出口とは反対の方向。地下まで直通のエレベータ。

備え付けのスクヤナを手に取り、胸元を開いて、Jは自分のタグを認識させる。滑らかにドアがスライドして、真っ白な壁が現れた。光りとJが中に入る。

「降りろ」Jが言った。

周囲にボタンはない。Jの声紋が第二の鍵なのかもしれない。ひと時の、浮き上がる心地。

二人は地下へと降りていく。どこか落ち着かない気持ちで、光りは立ち尽くしていた。

2

出撃まで一時間もあるというので、橙はシャワーを浴びていた。拳の傷はほとんど癒えている。痛みは、まず、感じられない。次に戻ったときには傷自体を忘れているだろう、と橙は思っていた。

（戻ってこれれば、の話だよね……）
保証はなかった。

シルヴァとは一度手を合わせたのみ。

相手をぎりぎりまで追い込んでいながら、あっさり逆転されてしまった。

（違う、あれはスーツが消耗していたから）

今度は万全だ、と彼女は考える。

（私は橙なんだ！ 負けるはず、ない）

それでも、あの印象は強烈だった。窮地にありながら、むしろそれを楽しんでいるような精神——それを思い出すだけで、橙は恐ろしい気持ちになった。

（私は、死ぬのが怖いのだろうか？）

昨日見た夢と、死に脅えている今の自分と、どちらが本当なのか橙にはわからなかった。

（だめだ。死を恐れる限り、私はシルヴァに勝てはしない！）

乱暴に、髪を洗う。遺書でも書いておこうかと思いついて、橙は恥ずかしそうに笑った。

お湯が沁みたような、気がした。

3

「ドクター、これは？」

地下倉庫の扉が開いて、中の灯りがオートで点く。全体を眺めてみたものの、目の前の物体がなんなのか、光りには判断できなかった。

外見からして一番近いと思われるのは、大型の電磁二輪だ。しかし、あるべき位置にシートがなかったし、車高も高すぎるように思えた。

「近づいてみたまえ」

「」に従って、光りは機械に近づく。

途端に、機械から静かな駆動音が聞こえ始めた。真っ黒な外見の側面と上部を覆った装甲が真ん中で別れて展開し、シートが見えるようになる。ちょうど、こうもりが翼を開くような格好だ。ただし、こうもりに喩えるなら足の方が機首になる。更に、ダークグレーのキャノピーが後ろにスライドして、操縦席が露出した。

開いた装甲板には拳大の球体があちこちに取り付けてあり、それぞれに円形のくぼみがあった。一つ一つを見ると目玉のようで、光りは気持ちが悪くなった。

「乗ってみるといい」

「」が更に促す。光りは機体に座り、正面のディスプレイを見た。バイク、というよりも座席自体は四輪に近い。背もたれがちゃんと付いていて、衝撃緩衝用の拘束具が付いている。操縦系は航空機に酷似していた。

「搭乗者：光りを承認。機体を起動中……」

「これ、何です？」

光りは「」の方を向いて言った。わかったのは、自分がマスターとして認識されていることだけだ。

「君のために用意したマシンだ。わかっていると思うが、君は戦闘に向かない。だが、君の力は情報処理に特化されたものでもないのだ。体のことさえなければ、橙よりも君の方が優れている」

「」を光りは睨みつけた。そう、彼は知っている。あらゆる点で、自分が橙よりも優れていることを。幼少からの苛烈な訓練——そこから得られたスペック（とDr.「」は言う）は、明らかに光りの方が上だった。

唯一の、そして致命的な欠陥である、耐久力を除いては。

本来、スーツのテストは光りの役目だったのだ。光りの体が狂ったために、補欠の橙が代わったのである。

「君の能力はもっと生かされるべきだ。だから、君を補助するマシンを開発していた」

OSが立ち上がり、光りはそれをチェックする。

「狙撃、ですか」

目まぐるしい速さであちこち操作していた光りは、ディスプレイから顔を戻し、再び「」を睨んだ。

「そうだ」まったく無表情に「」が答えた。

「なんで……もっと早く見せてくれなかったんです？　これがあれば、今までの任務で姉さん一人に無茶をさせることはなかった」

「」は光りから目を逸らさずに、

「ロールアウトしたばかりなのだ」

と言った。

「嘘だ！　このOSの仕様は——。もっと前に出来上がっていたはずだ！」

光りは車体を「」に向け、トリガーに指を掛ける。機体の正面が開

いて、銃口が顔を出す。

「私個人の開発だった」Jが言った。

はっとして、光りは指を離れた。銃身がひとりでに収納されて、車体正面のカヴァが閉じた。

「これは会社の命令ではない。が、君達二人を失うのは恐ろしいほどの損失になる」Jは眼鏡に指をやり、位置を正す。「君達は貴重だ」

人権を無視した物言いだ、光りはなんとも思わなかった。生きていくためには貴重であることが必要だ。

「説明をしようか」

どこかつまらなそうにJが言った。アイデアを現実のものにした時点で彼の興味は尽きている。正確には、発想を理解し終わった時点で、だろうか。

「まず、今君が使おうとしたのが狙撃用のレイザ・ライフルだ。高出力・高精度だが、冷却装置などの関係から一度しか撃てない」

（一発、ね）

光りは頭を掻いた。

「あなたの発明って、そんなのしか無いんですか？ 何というか、使いにくい……」

「“そんなの”はないだろう？ 狙撃は一発と相場が決まっている」
（どこの相場だか……）

「次に、その目のようなものは近接戦闘になったときの迎撃装置だ」
Jの声にだんだんと熱がこもってくる。ノってきたようだ。

「聞いて驚け、それら全部が小型のレイザ・ガンになっている。しかも！パイロットがロックした標的をオートで狙ってくれるのだ！」

「ステルスは？」

「勿論、標準装備である！ そのための装甲板だ」

（それで、すっぱり覆っているのか）

「Dr・J、質問があるんですけど」

「ん、何だ？」

「狙撃手って、見つかったら終わりじゃないですか。なのに見つかったときの武装がしっかりしているというのは……」

（“目玉”がなければ2、3発撃てたんじゃないのか？）

光りが疑うような目をした。

「……」

Dr. Jは黙ったままだ。光りは盛大にため息をつく。

（優秀なんだけどね……）

「ま、まあ、何だ、細かいことは気にするな。輸送機に積んでおくよ。まだ日も高いし、今回は空から行きなさい」

（この人、やっぱりMADだ……）

「名前は、何にするのかね？」

光りがパネルを見ると、機体名の設定を要求されていた。

機体を降りて、黒い塊をもう一度見渡す。離れて見ると、操縦席を覆っていた装甲版が反転し翼になっているのがわかった。一旦左右に開いて装甲の付け根で回転し、向きを変えたようだ。

「これは、どうなっているんですか？」

待ってましたとばかりにJが歩み寄る。

「これは高速移動形態だ。翼で制動することにより速度を稼げる」

「では、あの閉じた状態は？」

「あつちは速度よりもステルス性を重視した形態だ。狙撃形態と言ってもいいかな。どちらの状態でも撃つことはできるが」

（翼……ね）

光りは自宅で読んだ本を思い出していた。

（この形、どこかで……）

それは、翼を持ち、四本足で嘴のつがった、伝説上の生き物だった。

（そうだと……“griffon”だ、これは）

パネルは機体名をせがんでいる。

（そうか、お前も名前が欲しいよね）

機械を得意とする者故だろうか、光りはこの機体に愛着が湧き始めていた。

「決めました。今日からコイツは“Griffon”です」
そのセリフを聞いて、どこか感慨深そうにDr・Jは頷いた。
約束の時間が迫っていた。

4

薄暗い機内で、光りはオペレータの位置に、橙は降下の準備をして機体の後方に座っていた。

あれから一時間後、橙は屋上に呼び出され、着陸していた輸送機に乗り込んだ。濃い灰色の飛行機で、両翼には巨大な推進器が付いている。輸送機のお腹にはコンテナが装備されていたのだが、橙は気に留めなかった。

今はもう、飛行機の中。Dr・Jの説明を彼女は反芻する。

変更点はバリア。修正点は燃費の問題。

バリアは以前より強力になったかわりに実弾兵装しか防御できず、しかも、連続使用時間が極端に短くなった。二十秒が限界な上、再び使うまでには一分も待たねばならない。戦いながらの一分がどれほどのものか、Dr・Jはわかっていないようだった。

だがそれも、使い方次第。中途半端な代物よりこちらの方が性にあっている、と橙は思った。

燃費についてはエネルギーパックで解決を図った。左腰に装填しておきさえすれば緊急時に助けてくれる。予備のパックを納める部分もスーツに新設されていて、ポケットのようなものが増えていた。光りもJも、“Griffon”のことを橙には黙っていた。彼女が知れば、必ず光りを止めたからだ。後で殴られるのを覚悟して、光りは飛行機のシートに座ったのだった。

ジェネレータが始動してゆつくりと機体が浮かんでいく。翼はまだ地面と垂直だ。高度をある程度稼いでから主翼が地面と平行になり、機体が加速した。

小さくなっていくそれを見つめながら、Jは煙草に火をつける。あたりを見回して、白衣の胸ポケットから携帯用の端末を取り出した。

「橙と光りは出た。全て、予定通り……うん……うん、もちろん、記録している。回収をよろしく……では」

通信を切って、もとあった位置に端末を片付ける。口に咥えた煙草が煙たい。輸送機の飛んでいった方向をJは見つめている。

「“Griffon”。知の象徴、か。まったく彼らしい。そして、もう一つ……」

しばらくの間、彼は煙草を味わっていた。灰が崩れ、宙を舞って消え去る。

Jが飲み込んだ言葉は、グリフォンにまつわるもう一つの神話。かの幻獣の役割は、義憤の女神の馬車を引くこと――。

5

「JよりSへ。もうすぐ、目的地上空に入るよ」

緑色のバイザアに光りの顔が映っていた。実際の所、周囲が暗いのでバイザアの色が判別できるわけではない。

光りの画像が左隅に小さく出ている。上端には「On Line」と表示されていた。

お互い、仕事前には直接話しかけないことにしていた。光りが橙の傍にいないことが多いからだ。心細さを実感しないようにと、出発前はいつも同じ雰囲気になっていた。

アラームが小さく鳴って、降下までのカウントダウンがバイザアの右上で始まった。橙は輸送機の最後部に向かう。分厚いドアがス

ライドして、目の前に後部ハッチが現れる。くぐり抜けたドアが閉じて待機室とは隔たれた。

カウントが30秒を切り、正面のそれがゆっくりと開き始める。機内とは気圧が違うから、橙は、外界へと吸い出されそうになる。

「場所、わかるよね。一応、GPSに表示されてるから、困ったら確認して」

光りが伝えてきた。

「了解」

残り、10秒。

「行つてらっしゃい」

光りがバイザアから消えた。

口を閉じたまま、橙は空へと飛び込んでいった。

6

「以後、Sからの通信は全部グリフォンに回して」
輸送機のパイロットに光りが言う。

「了解です。この後はどうされるのです？」

「五分くらいまっすぐ飛んだら引き返して。同じ位置で降下する。それが終わったら、君は基地に帰って」

待機室に移った光りは、その端末から返事をした。床板を一枚外して、隠しておいた保管庫を開ける。光り専用のスーツだった。

衝撃緩和に重点が置かれ戦闘能力はほとんどないものの、その分光りの体をいたわることが出来る。戦闘はグリフォンでやればいい、という発想だった。カラーリングは橙のそれと異なり、青が基調で翼もない。背中のジェネレータだけが共通で、深い青色のスーツにエメラルド色のラインが胸から広がっている。

「翼を持たず、なにかに寄りかかるばかり……」

与えられた装備に皮肉を感じて、光りは不健全な笑みを浮かべた。
(それでも……)

「力あるは幸いな、かな」

（そうだ、今日からは姉さんの力になれる。一方的な依存なんて今日限りだっ）

「まもなく、降下予定ポイントです」

パイロットがそう告げ、ダークブルーのバイザアでカウントダウンが始まった。

光りは機体後部からはしごを降りて、コンテナの中に入る。装甲板の“目玉”が一斉に彼の方を向いてグリフォンが起動を始めた。コンテナの側面にはレールがあり、グリフォンはそれで固定されていた。

（本当に生身の生き物みたいだな。ちょっと気持ち悪いかも……）

「ドクター、いい趣味してるよ、まったく」

シートに座り、装甲を閉じる。

一旦乗ってしまえば、外見を気にする必要はなく、嫌悪も湧かなかった。むしろ、自分を守るために周囲を見張ってくれているようで（事実、そうなのだが）、光りには頼もしく思えた。

グリフォンのディスプレイがアラートを発し、コンテナ後部が開放されたことを知らせてきた。

「予定ポイントまであと一分。機体、射出準備に入ります」

「時間ならわかってる。傾けていいよ」

「了解」

パイロットの返答後、コンテナ内のレールの角度が変わった。グリフォンの機首は輸送機と同じ方向を向いている。今は機首から後ろにかけて傾斜が出来ており、レールのストッパが外れることで、グリフォンは後ろ向きに飛び出すことになる。

「ロックは僕が外す。余計なことはいらないからね」

「承りました。御武運を」

カウントが十秒を切る。スイッチに指を添える。

オートにすることもできたが、何となくはばかりで手動にしてみた。

4、3、2、

「グリフォン、出るよ」

レールアウト。

ふわっと、重力が無くなる。

それに合わせて光りは翼を展開した。

機体が安定し、降下していく。

光りにとって、初めての実戦が始まったのだった。

7

日は、西に傾き始めていた。

空の色、空気の味、何もかもが違うのに、橙はある種の既視感を覚えていた。落ちていく感覚が、昨日見た夢の再現のようだった。

現在、橙は目標に向かってオートで滑空している。

残された情報から光りは、シルヴァの位置を百メートル四方の範囲に特定していた。

眼下に広がるのは、スラムの山。王麟の一部とはいえ、一昨日の廃屋よりも治安の悪い地域だ。朽ちかけたトタンの板や元が何であつたかわからないような物で、建物と建物を繋いでいる。望遠せずに見ると、死骸に群がった蟲達のように隙間がなく、地面が見えない。

あのシルヴァなら、限定した範囲の中でもど真ん中にいる、と橙は確信していた。昨日、あれだけのことを言っておいて、こそこそするとは思えない。

とはいっても、上空からは進入する経路が少なく、結局、端の方から僅かな間隙を見つけて入り込んだ。

（都会の密林とはよく言つたもんだね）

橙が足を踏み入れた領域は、またの名を「魔の森」といった。その住人は、日光で死んでしまうとも言わんばかりに、陽光を遮断した。結果、その内側はとても人の世とは思えぬ、淀んだ、腐った

世界となっていた。

乳幼児死亡率は100%を切るか、切らないか。治安と衛生面の劣悪さが生み出した、滅びの世界。……否、むしろ滅び続ける世界、と呼ぶのが適切だろう。命が育まれることがない代わりに、死者の分だけ外から人が入ってくるのだ。腐りかけた人を完全に土に還す世界、と言えばもう少し聞こえがよからうか。この狂った都市 王麟が、何とかバランスをとろうとした結果なのかもしれない。きっと、中央が華やかであればあるほど、ここの醜悪さも増すのに違いない。

光りのない世界。

スーツのバイザは暗視モードに切り替わっている。

（生きて戻れたとしても、このスーツ、廃棄処分だろうなあ）

ジェネレータの出力と相談しながら、橙は、できるだけ速さでシルヴァを探した。蟻の巣みたいに複雑な道が三次元的に広がっている。GPSを頼りにひたすら前進し、行く手に明かりが見えたとき、そこに彼が居る、と橙は直感した。

道を飛び抜けて、それを見る。一瞬、橙は、ここがどこなのか分からなくなった。

上空から見たときには、スラム全体が何かでびっしり埋められていた。だから、ここまでの道のりは全て真っ暗で——ところが、その天井から、太陽が降り注いでいるのだ。

（これ、教会だったんだ）

かつては白かったはずの壁面には毒々しい蔦がはびこり、壁自体も黒ずんでいた。高い尖塔には折れた十字架の根元だけが残っている。正面のドアはとうに崩れており、建物は暗い口を開けて橙を誘っていた。

（……行こう）

踏み出した足が、暗闇に浸かった。

「姿勢維持良好、各部異常なし……」

青のバイザアには機体姿勢・水平位置・速度・高度・ジエネレータの状態といった情報が映っていた。これまでの光りは橙を運ぶのが仕事だったため、彼は、様々な機体の操縦を会得している。

姿勢が安定したのを確認し、光りは操縦をオートに切り替えた。レーダに表示された橙はまだ止まっていなかった。まっすぐ、中心部へと向かっているようだった。

高度の表示を見て、光りは翼を閉じる。機体下部から滑らかに翼が反転し——この状態で、ちょうど羽を開いたこうもりである——纏うように装甲版が閉じて、キャノピーが覆われた。それに合わせて機体底部の推進器が仕事を始める。揚力は充分だった。真っ暗になったコックピットはすぐに外界をモニタしてキャノピーの内側に映し出す。ステルス・モードである。

雲を突き抜けたとき、たとえ誰かが光りを探そうとしたとして、もうそこには何も見えなかった。ただ、陽炎のような塊が地上へと向かっていった。

そこは広がった。

本来あるべき椅子達は存在せず、巡礼者も聖職者もない。奇妙な静寂が、辺りに満ちていた。壁は崩れ落ち、往時には荘厳の象徴だったはずの柱は見る影もない。

建物の一番奥に大きな窓があった。そのステンドグラスだけが、不自然に新しい。薄汚れ、廃れきった世界の中で、その窓だけが輝きを放っている。

ステンドグラスの直下には巨大な十字架が据え付けられていた。半ば崩れかけて、酷く傾いている。その根元に、男は立っていた。

窓からの光りが、男に降り注いだ。

入り口で立ち止まって、橙は男を見、シルヴァは振り向き、

「早かったな」

と言った。黒いロングコートが翻って、衣擦れの音をたてた。

「あなたが、誘ったんでしょ？」

橙が答えた。

「いや、降りてからここに来るまでのことだ」

橙の背中を冷たい感覚が伝った。

「いつから、気づいてたの？」

「お前があのを会社を出てから、ここへ来るまでだ」男は肩を竦めた。

「私には——何故だか知らないが——お前を感じることができる」
(動揺を、誘っている?)

一瞬そう思つて、橙は即座に打ち消す。そんな雑魚ならここまで手を焼かされはしない。

「最初は錯覚だと思つていた。ただ、昂っているだけだ、と」シルヴァは橙に向かつて足を踏みだす。「ところが、そうではなかった。お前があのを会社にいることはわかつていた。だが、昨日お前に会ったのは、間違いなく私の勘だった」

男は歩みを止めない。一步一步と近づいていく。凍りついたみたいに、橙は動けない。

「お前は、何者だ？」シルヴァが止まった。眉間に皺を寄せて、橙を見つめる。

「私は、橙。あんたもよく知っている、“太陽”だ」

動かない体を駆使して、橙はようやくそれだけを言った。少し前から、頭痛を感じていた。

「違う。それはお前の役職、もしくは記号だ。私が言いたいのはもっと本質的な、そう、魂、というようなことだ」

再びシルヴァは歩き始める。だんだんと距離が詰まった。橙は必死に体をほぐし、戦う姿勢をとる。

「そんな話をするために、私を呼び出したの？」

シルヴァが立ち止まって、両手を上げた。降参のポーズ。

「もちろん、ノーだ。だが、殺してしまってからでは、何も聞けなくなるだろう？ 私にだって人並みの好奇心はあるよ」

黒い箱が二つ、空気を切り裂いて、高い天井から降りてきた。

「まあいい。どの道私が興味を持った時点で、お前を殺すことは決まっていたのだ。お前を殺せば、今までにない充足を得られるのかもしれない」

飛来した箱が、シルヴァの両腕に、はまった。

「さ、踊ろうか」

箱が壊れて、シルヴァの両腕があらわになる。

（あれは……なに？）

彼は、前腕をすっぽりと装甲で覆っている。濃い緑色のそれは昆虫を思わせるようなフォルムで、幅がシルヴァの腕の三倍はあり、大きく膨らんでいる。不自然に太くなった前腕の先には、長い、爪のような刃が三本あった。

（なんて、デザイン……）

魔の森の王、そう表したとて差し支えなかった。アンバランスな姿が返って恐ろしい。動作のチェックのためか、両腕の爪をシルヴァはばらばらに動かしている。

前触れは全くなかった。

彼女が気づいたときには、望遠していたバイザアをシルヴァの体が埋め尽くしていた。

鋭く、舌打ち。

バイザアの調節機構が追いついていない。橙はすぐに望遠を切る。推進器を噴かして上空へ。

（あの武器、接近戦主体？ 近づいてはダメか……）

腰のリボルヴァを右手で抜く。シルヴァに羽がない以上、上から攻めれば勝てる、と橙は思っていた。

自分が飛び立った位置を見る。シルヴァは、いない。

レーダを読む。その僅かな時間、橙は自分の油断を悔いた。
真上から、シルヴァの爪。

ロールして正面を向きながら、左手でナイフを抜いた。
辛うじて、防ぐ。シルヴァを視認して、離れた。

男の両腕は推進器の役割を果たしていた。爆発的な加速を生かして相手の死角に入り込む、という設計思想のようだった。

「よくも腕がちぎれないものね」軽く毒づく。

スーツを確認。異常がないのを見て、橙は胸を撫で下ろした。この戦いにおいて、背中の推進器は生命線だ。シルヴァに対抗するには、絶対に壊してはならない。瞬間的な加速度を除けば自分の方が速い、と橙は計算した。シルヴァには遠距離攻撃用の武器がない。しかし橙には、ある。それが、勝機。

彼女は冷静だった。当初の予定通り、中距離からの射撃で近寄せなければいいのだ。

シルヴァが突っ込んでくる。

橙は、男を中心に円を描く。相手の背後に回っては、撃つ。

だが、シルヴァも簡単には命中させなかった。反転、ロールを繰り返し、隙あらば首をかこうと接近した。

それでも、橙のディフェンスは熟練していたし、彼女の予想通りの展開が続いていた。

何回目かの攻防で、一瞬正面に見えたシルヴァを橙は不思議に思った。

（爪が、二本？）

記憶では確か、三本だった。そして今回も、レーダを見るのが遅かった。

バイザアに警告表示。目の前のシルヴァに気をとられて、反応が遅れた。

回転する刃が高速で襲ってくる。背後と、頭上。

シルヴァからは目を放せない。男を注視しつつ、宙返りし、頭と

背中を刃がかすめていくを触知する。

——冷や汗。

けれど、それでは終わらなかった。かわしたはずの刃は向きを変えて、再び橙に向かってくる。しかも、速い。

一つを銃で撃ち落とし、残りの一つは、やり過ぎた。かわしざま、すかさずナイフで切り払う。超人的な身のこなしであったが、しかし、今度はシルヴァを見失っていた。

男の爪が、下から切り上がる。

崩れた体勢で受けたナイフは、その衝撃に耐え切れず、折れた。そのまま、致命の一撃が喉元に向かう。

橙は推進器を切って、失速した。顔の上ぎりぎりを金属が走っていく。前髪が散る。

刃の位置から判断して、撃った。正に、ゼロ距離。着弾に合わせて、視界に納めたシルヴァの腕が揺れる。

（殺ったの？）

気は抜かない。再び距離をとった。着地したシルヴァは、コートを脱ぐ。

「流石、“太陽”というだけのことはある」

当たったはずの弾丸が、床に散らばっていった。

「やはり、このままでは無理だな」

（何を、言っている？）

またしても、体が固まっていくのを、橙は感じていた。

（今が彼の全力でないとしたら？）

すぐさま、橙も着地した。推進器を切る。

（早く、回復して！）

エネルギーパックはまだ温存しておきたかった。

「ウォーミングアップで殺してもつまらないからな。武装を限定していたが……失礼した」男は軽く頭を下げる。「危うく様子見で死ぬ所だった」

（様子見、か）

橙はりボルヴァの弾丸を込めなおす。空葉莢が綺麗な音をたてる。
「仕切り直し、ということ？」
男は頷く。

「そうだ。ここからは、本気でお相手しよう」
シルヴァの目が、赤く、輝く。

10

光りは困っていた。

魔の森の天井は、彼が思っていたよりも厚く、密になっていたのだ。レーダ上では橙が激しく動いている。その表示は戦闘の始まりを告げていた。

操縦桿を握る手に力が入る。

グリフォンには長距離射撃用の武器しかない。従って、魔の森に突進し、橙のもとまで行く、という選択肢はありえなかった。仮に辿り着いても、足手まといである。

といって、魔の森を天井ごと撃ち抜くわけにもいかない。なにしろチャンスは一度しかなく闇雲に撃つことはできないし、敵を視認できない状況で博打を打つのは得策でない。いざとなれば、光りは突っ込む気でいたけれど、まだそのときではなかった。スーツのモニタリング機能がいかれていないのならば、橙の装備はまだまだ健在でエネルギーパックも残っているようだった。

「落ち着いて、冷静に。合理的な手が、必ずある」

光りは話しかけて、かんだ右手をなだめすかす。

そのとき、グリフォンの「目」が、異常を感知した。橙のいる方を一斉に向き、コックピット内にアラームが鳴る。光りのバイザーにも警告表示。

「高エネルギー反応——射線上だって!？」

橙のいるところから強烈なレーザが向かってきた。グリフォンの

「目」が仕事をし、油断した主人に代わって機体を回避させる。

「無事、か……損傷は？」

バイザに映る情報は、機体が正常であることを教えていた。光りはほっとすると同時に、レーザーの出所を拡大する。

（シルヴァ、なのか？）

それはもう、人間とは思えない姿だった。生身の部分を装甲が覆い、新型の戦闘マシーンとしか思えない。

（あれは……）

どこかで見たような気がして、光りは記憶の糸を手繰ろうとする。その間にも巨大なレーザーが空を焦がし、魔の森の天井に風穴が開き続けていた。光りは自分とグリフォンの「目」を生かしてかわす。敵は自分を狙っているわけではないようだったが、レーザーのあまりの大きさにしばしば巻き込まれそうになる。

（そうだ、あれは、強襲用強化スーツ——うちの会社が研究してるのじゃないか！）

随分前の話だが、MM社の研究部で一度だけ光りはその姿を見ていた。試作段階だったものの、望遠されたそれには当時の特徴がはっきりと現れている。

（冗談だろ。勝てるわけ、ない）

橙の装備はあくまで捕縛、偵察用である。そもそも戦闘向きではないのだ。普段は敵の力が圧倒的に不足しているから気にならないが、シルヴァが使用しているのは同門のスーツだ。しかも、向こうは戦闘専用ときている。火力、装甲では足元にも及ばない。唯一、橙が勝っているのは運動性だが、向こうもそこまで鈍くはない。総合力では圧倒的に橙が劣る。何より、彼女の武装ではシルヴァに傷一つ付けられないのだ。逃げ回っても無駄。

光りの手がコンソールに走る。研究所のデータベースに繋いで、検索をかける。

「……あつた！ 強襲・拠点防衛型スーツ、玄武か」

光りはデータに目を通す。

玄武：強襲、拠点防衛用スーツ。

着脱可能な付属装備を付け替えることでどちらの任務にも対応する。

重装甲、高火力を誇り、正に歩く要塞。

現在は付属装備の煩雑さから、テストパイロットがおらず、運用性も低いとのこと開発は中止。

（何でこんなのが出て来るんだよ）

有効な武装はグリフオンのライフルだけだ、と光りは悟った。一度しか撃てないが、それだけに相手よりも威力がある。何しろ、これしかできないのだから。

（確実に仕留めるためには……）

橙の協力が必要だった。彼女が誘って、光りが撃つ。

しかし、伝える方法がなかった。バイザアの通信機能は、シルヴァに傍受されてしまうだろう。ディスプレイに表示した敵のスペックが、そう語っている。

「チャンスを待つしかない」

光りは唇を噛み、今や天井の消え去ってしまった地上を望遠した。

11

シルヴァがそれを身に着けたとき、橙は声を失った。最初に武装した鍵爪は、決して不釣り合いなパーツではなかったのだ。ただ、他の部分が存在しなかっただけで……。

次々とコンテナが飛んできて、男の体に近づいていった。

「うわぁ、いやな感じ……」

下方に大きくフレアした装甲がシルヴァの両足に付き、膝の上までを覆う。コートを捨てた胴体には腕部装甲と同じ色の分厚い鎧が装備され、その真ん中には青く光る円が見えた。

（あれ？ 何か、似てる？）

装甲、武装ともに圧倒的な重量感を感じさせたが、胸のデザインに橙は似たものを感じた。

バックパックが増設されて分厚い翼が現れる。橙のそれが鷲の羽根のようであるのに対し、シルヴァの翼は肩甲骨を拡大したようなごついものであった。バックパックの推進器も、橙のとは比較にならないほど大きい。後ろに出っ張ったその側面には、左にガトリング、右にレーザキャノンが存在した。

頭部に施された装甲にはワインレッドのバイザアが付属されている。そこからの視線を橙は知覚した。

「お待たせしたな」

バックパック側面の武装が前方に動いた。二丁の兵器を小脇に抱えるようにして、シルヴァは構える。

「第二部、開幕だ」

騒音を撒き散らしてガトリングが回転し、弾丸を吐き出す。橙は、飛んだ。避けた先の壁面が、文字通り、蜂の巣になる。

（逃げ場が、ないっ。ここじゃ、だめだ！）

ロールしながら、天井近くまで上昇。

射撃が激しくて、とても入り口まではいけなかった。別な出口を開ければいいのだが、あいにく武装はどれも力不足だった。

ポケットからエネルギーパックを取り出し、近づいてきた天井に橙は放り投げる。弾幕が翼にかすって、がくんと姿勢が揺れる。

（しっかりしなさい、ポンコツ！）

立て直した体を維持してリボルヴァを撃ち尽くす。高速移動しながらの射撃は困難を極めた。

狙ったのは、エネルギーパック。

（あたしの弾じゃなくてもいいから、爆発しなさいよ！）

彼女のか、シルヴァのかはわからないが、パックは爆発した。蓄積されたエネルギーが吹き上がり、天井に穴を開ける。

橙は急降下。

左手で爆弾を取り出し、シルヴァに投げる。

当然途中で撃ち落とされるが、炸裂した後、煙が湧き出す。

「ステルスモード、始動」

橙は小声で呟く。音声認識がそれに答える。彼女の姿が消え、シルヴァのレーダーからも光点が失われる。

「ちい！」

バックパックが唸り声を上げて、シルヴァが高く舞い上がる。

「逃げたのか？」

穴の開いた天井。煙は収まったが、肝心の橙が見当たらない。

「どこへ行った！」

男は地面に降り、部屋の隅にはりつく。

その正面に橙はいた。ゆっくりではあったが、男に近づく。

（もう少し……）

狙いは装甲の隙間、つまりは関節だ。

リボルヴァの残弾も少ない。最後のチャンス。

愛銃の射程ぎりぎりですら発砲しても、シルヴァには迎撃されてしまう。なんとも厄介なスーツだった。まだ、遠い。橙は男を睨んだ。悟られないように軽く浮かんで、接近を試みる。

敵が見えない——そんな状況で、男は静かに笑った。戸惑いの表情がなくなり、堂々と構え直した。

（何を、するつもり？）

極限のプレッシャーに、橙の額を水滴が流れ落ちた。自分の数十倍の火力を正面にして、距離を詰めているのだ。その恐怖は彼女とて感じる。

無限とも思えるその距離を、橙は超えられなかった。

何かの蓋が開くような、金属音。間をおかず、男の羽からミサイルが湧き出して、上空を埋め尽くした。水平方向にはガトリングが掃射され、ミサイルの間隙を真っ赤なレーザーがカヴァしていく。

橙は顔をしかめた。

上は、だめ。横も限界がある。加えて、今はステルスモードだ。

速力が、出ない。

はっとしたときには、もう、銃口が向こうとしていた。

（バリアは……なかったんだ！）

気が動転する。

ステルスを解き、後退しようとしたとき、バイザアのゲージを見て絶句した。既に警告が3回も発せられていたのに、橙は気づいていなかった。

ジエネレータの出力が追いつかず、エネルギーが、尽きた。

12

ゲージがゼロに達してから一拍、エネルギーパックが始動する。

スーツが復活するが——遅すぎた。銃口の中で火花が散るのを橙は見る。一拍のタイムラグが恨めしい。

（チェック・メイトかぁ。ごめんね、光り）

弾丸が走っている。一瞬、弟の顔がよぎった。

橙は両手をクロスさせ、無防備な首を保護する。それが気休めに過ぎないと、彼女にはわかっていた。

仰向けに倒れていく。

えぐられた壁面。

崩れ落ちた天井。

大きく広がる空。

天空は、赤銅色だった。

——カチンツ、ゴトツ。

不思議な音が、聞こえた。シルヴァの薬莢ではないし、何かが崩れた音でもない。

バイザアを見て驚く。

フルチャージされていたゲージが、ほとんど空になっている。

腰に装填していたパックが空になり、自動で排出されたのだ。

「お前、何をした？」

シルヴァが呆気にとられていた。

（そうか、これが“指向性磁場防壁”。あたしの防衛本能に反応して……）

弱った四肢を駆使して、ポケットをまさぐる。エネルギーパックがない。衝撃で落ちてしまったようだった。

（意識ある限り、あたしは負けない。あたしは橙、“太陽”と呼ばれた女だ！）

体を起こす。

僅かなエネルギーを使ってパックを探す。

——あった。

僅か、１メートル先。

手を、伸ばす。

足で体を押す。

あと数センチが、どこまでも遠い。

橙の全てが、軋んでいた。指が振るえ、痛みは全身を貫き、それでも彼女は諦めない。

（あれに届けば、まだ戦える。簡単に、死ぬものか！）

彼女の中に死への恐れはもうなかった。弟のことさえ、消えていたろう。「ただでは死ねない」、それだけが橙の心に渦巻いていた。だが、パックに爪が触れたとき、その手首は踏みつけられた。

「無様だ、橙」

シルヴァがそこにいた。

「お前がどうやって生き残ったのか不思議だった。説明してくれないか？」

橙が睨みつける。グリーンバイザは左半分が無くなっていた。「何で、わかったの？……うつ」男が体重をかけた。橙が顔をしかめる。

「建物の中に、という意味か？ 簡単だ。お前は——“太陽”は逃

げない、と思つたからだ。……それよりも、質問に答えてもらおうか」

右手からは血が流れ始めていた。手首から先の骨が、完全に砕けていた。

彼女は、無言で睨み続ける。

「わかった。もついい。好奇心を満たすのは諦めよう」

金属同士の擦れあう音。橙の眼前に、レーザー・キャノンの巨大な銃口が突きつけられる。

「この距離で、この武器なら“手品”もできまい」
その通りだった。

指向性磁場防壁は、電子をもつ物に効力を発揮する。レーザーはエネルギーの一形態、“波”だ。強烈な周波数がエネルギーを帯びており、それに干渉したもののエネルギーを譲り渡す。人間について言えば、黒こげになる、ということ……。

「蒸発させてやるよ、橙。火葬の手間が省けるだろう？」

“カソウ”ということばが橙にはわからなかった。聞いたこともなかった。

（やっぱり、だめかあ）

踏みつけられていなくても、体がいうことをきかない。最後の抵抗だ、と橙は男に鋭い視線を向ける。

キャノンのチャージが始まり、銃口の奥に輝きが生まれる。狙った周波数を作っているのだ、と橙は思った。何となくだが、懐かしく、美しく、思えていた。

その輝きは、どんどん高まる。

最期の時を見据えるために、彼女は目を閉じなかった。バイザアが壊れて露出してしまった左目を、橙は眩しく感じていた。

出力が臨界に達し、男が引き金に指をかける。愉悦に浸った表情をシルヴァが見せていた。

そして、

轟音が響き渡った。

光りは発狂寸前だった。

トリガーにかけた指は揺れ動き、これ以上ないほど激昂していた。
(抑えろ。痛いのはお前じゃない。橙なんだ！)

グリフォンの銃口はシルヴァをロックしている。決定的な隙を待ったために、光りは耐えていた。決定的な隙——それは、シルヴァが橙に止めを刺す瞬間である。

「まだだ、まだまだ……」

呪文のように呟く。

レーザの出力を絞り、男だけを照準した。

狙いは、胸の制御サークル。カタログスペックでは、そこが最も弱い。

「姿勢固定。射撃後は——“高機動モード”へ」

静かな、発声。音声認識が働く。

『射撃後、高機動モードへ移行』、とバイザアに表示された。

シルヴァが、右手のレーザ・キャノンを構える。光りの指が軽く動いて、安全装置を外す。『ロック、解除』、の表示。

シルヴァが引き金に指を掛ける。同調するかのように、光りの指もトリガーに触れる。——そのまま、滑らかに、迷わずに、それが引かれた。

射撃の反動を機体が吸収する。

着弾。

光りはスロットルを押し上げ、加速させた。彼には、シルヴァの直前でレーザが逸れたように見えた。

急上昇して機速を稼ぎ、翼を展開する。

そこから、急降下。

シルヴァは、吹き飛んだ後に起き上がった。

（仕留められなかった――）

男のバックパックからミサイルがあふれ出し、グリフォンに集まってくる。“目玉”がオートでレーザを撃ち、迎撃する。

機体と一つになって、光りはアクロバティックに動いた。バイザアには冷却装置の機能不全が表示されている。狙撃のせいだ。

エネルギーも半分を切った。過保護な機体は、勝手に迎撃を続ける。エネルギーが減っていく。

「……迎撃装置、カット」

光りが凍った声で言った。

「搭乗者、光りのスーツに付属したジェネレータのエネルギーを、グリフォンに供給」

バイザアに警告メッセージ。

振り払うように、光りはそれを消す。

もう、ミサイルは減らない。

「Sへ、こちらL。ただちに離脱せよ」

バイザアの通信。

もう、傍受されようが、知ったことではない。

（自分にできること、それは……）

橙を示す点がレーダ上で移動を始める。光りはにつこり笑って呟く。

「そう、それでいいんだよ、姉さん」

砲身の状態を確認する。冷却は、終わっていた。

（ライフルが熔け切ったっていい。どうせ突っ込むんだから）

ミサイルが近づく。

操縦桿を切る。

右へ、旋回。

曲がり際、「チャフ！」と、短く、光りが言う。

機体後方から金属片が舞い散って、ミサイルをかく乱する。

再び、光りは地面に向かう。

仕留め切れなかったミサイル達がついてくる。

グリフオンは地上ぎりぎりまで機首を戻した。再びチャフの群れが舞い上がり、追跡者は消えた。

シルヴァをサイトに入れ、ロックする。やや、遅れて、レーザーのチャージが終わった。

「さようなら、橙」

透明な笑顔で、光りは呟く。彼の右手は安全装置を外し、トリガーに指を触れさせる。

寂しさはなく、涼やかな心地で光りは目標を見ていた。

衝突の危険表示が出る。光りは、無視をする。

彼の左手に速度を落とすつもりはなかった。

赤く、ロックされたシルヴァを、光りは見つめる。

その目が、大きく、見開かれた。

14

一瞬の出来事だった。

橙が最期を覚悟したとき、シルヴァの体が吹き飛んでいたのだ。赤い、高出力なレーザーが男の体を押しつけていく。

不思議なことに、太いレーザーはシルヴァに命中する手前で拡散した。閃光の影で、あの、回転する刃が、主人を守っていた。切り離された爪は体半分まで熔解してしまっていたが、男は無事だった。六本の護衛は力尽きて、地面に落ちていった。

狙撃手を見つけたのだらう、バックパックからミサイルを射出している。撃ちつくしても、羽を切り離し、また新しいのと交換した。どこからともなく現れるパーツ達を橙はぼんやりと眺めていた。

「Sへ、こちら。ただちに離脱せよ」

バイザアの、通信機能。

（……光り？ あなたがやったの？）

ミサイルが空を駆ける中、シルヴァは上空に向けてキャノンを構

えている。

（行かなきゃ——動け、あたし！）

背中の翼が僅かに動き、橙の体を前方にずらした。痙攣する指が、パックに当たった。関節が壊れ、屈曲することもない右指で引こうとする。手のひらを立て、そこに引っ掛けるようにして、肘から先の動きだけで……パックをかき寄せた。

地面を擦りながら、彼女は右腕をたたみ、引きつける。うつ伏せの体は地に貼り付いたようで、起こせない。

左手が、今や動かない右手からパックを奪う。

のろのろと動き、パックは胸を過ぎ、腹の位置を超えて辿り着いた。

カチツという音とともに、エネルギー残量が戻ってくる。

翼を開く。

壊れかけた、嫌な音をたてていた。

上昇。

高く、高く飛び上がって、シルヴァの頭上に至る。

遅れて、シルヴァが橙を見上げる。慌てたように、彼はキャノンを構える。

一寸の迷いもなく、橙は降下した。

いつか見た夢の光景が、暴走した夜の道路が、橙には重なって見えていた。

息をするように、防壁を発動させる。

（いけ好かなかったのは、私自身だ。光りを疎ましく思った、この私だったんだ。だから——）

背の翼を切り離す。防壁が硬さを増す。

（——だから、墜ちるために、私は飛んでいたんだ）

真下に見えるシルヴァ。武器を構えて、待っている。

（撃っていいよ）

防壁を解く。

バイザアの隅に「射線上から退避」、という光りからの勧告が出

ていた。橙にはもう、見えていない。

（その代わり……）

右の拳が輝きだす。防壁が集中していった。熔け落ちたシルヴァの刃が、橙の拳に集まってきていた。

半分だけ残った部分が、シルヴァの方を向く。

（あなたは、消えてよ）

たとえ頭が吹き飛んでも、橙の刃はシルヴァを捉える。突進の勢い、橙の気迫——かわす術はもうない。

二人の距離が詰まっていく。シルヴァが引き金を引くのが、橙には見えた。

視界が赤く染まり、わけもわからず橙は墜ちていった。

（この右手だけは、崩さない）

それだけを、考えていた。

「……S、応答せよ。こちらL」

ノイズが混じる。バイザアがいかれたようだった。

「S、姉さん——橙！ 返事をしてよ——」

誰かが叫ぶ声を感じながら、橙の意識は溶けていく。

「光り、ありがとう」

うわ言のように呟いて——終わった。

15

埃を盛大に巻き上げながら、グリフォンは着陸した。前面の砲身は熔け、右の翼はちぎれてしまった。

そのダークグレーのキャノピーを蹴り上げて、光りが外に出てくる。真っ黒な機体は活動を停止しており、もう目玉が動くこともなかった。

あのととき、橙が急降下してきたとき、光りは瞬時に狙いを変えた。

シルヴァ、ではなくレーザキャノンを狙った。自機のレーザをぎりぎりまで絞り、目標が橙を攻撃する前に、武器だけを狙撃したのだ。その代償に、グリフォンは飛べなくなった。機速が落ち、高度も危険域だというのに、光りは姉に呼びかけていた。機体は地面に擦りつけられ、光りも酷く体を打った。スーツの緩衝機能は働いていなかった。

システムは落ち、キャノピーも開かない。

光りは力いっぱい殴りつけ、蹴りをいれ、どうにか外へ飛び出した。バイザアのレーダには橙の反応がなかった。

激しい戦闘で、辺りは瓦礫の山となっている。それまでの秩序は崩れ去って、平らな世界が広がっていた。

薄汚れた空気を掻き分け、体中を埃まみれにしながら、光りは姉を探した。シルヴァのスーツの残骸を見つけても、橙は見当たらなかった。姉の名を叫んで、光りは動き回った。

あてもなく探し続けた後、光りは目を閉じ、膝を折り、両手をついた。不思議と、涙は出なかった。ただ、実感のない空洞が彼の中に存在していた。

恐ろしいほど冷たい意識の底で、光りは姉のことを思い出していた。

訓練、食事、任務……。

ようやく彼の目から涙がこぼれそうになったそのとき、覚えのある暖かさを光りは感じた。睨が降りたまま、光りは走った。生まれて初めての感覚が彼を祝福し、導いた。

目を開けたとき、光りの目の前に、橙が横たわっていた。仰向けになって目を閉じている。光りは彼女の胸に耳を押し付け、命を聞いた。微かに、儚いビートが彼に伝わってきていた。

ガラス細工のような命を、光りは抱きかかえる。

ふらつく足で立ち上がり、病院へと歩く。

ついに、頬を涙が伝った。

まだ感じられる体温を救いに、彼は進んでいく。

太陽が沈んでいく時刻だった。辺りを暗闇が侵食し、王麟の中心部では照明が点き始める。

光りの口の中で血の味がしていた。戻しそうになるのを、彼は堪えていた。両眼からの雫が、橙の顔に落ちていった。

その時、光りはぎよつとして姉を見た。

彼女の右手が持ち上がって、光りの頬に触れ、その指で目じりまで拭った。

全身の力が抜ける。光りは、座り込んだ。彼女を抱えた手に自然と力が籠っていた。

世界は、真っ暗だ。

へりの駆動音とともに、都市の方から大きな明かりが近づいてくる。

光りは安堵して、橙を一層強く抱きしめる。額と額が重なり合う。

「光り……痛いよ」

サーチライトが当たり、へりからの風に吹かれながら、光りは確かにそのセリフを聞いた。

Epilogue

視界は、薄く白けていた。

あたしは首を傾け、自分の体を眺めている。得体の知れない沢山のチューブが繋がっていて、気味が悪い。

昨日は光りが来てくれていた。彼は隣に座ってくれたけど、あたしはまだ声も出せなかった。彼の隣のパネルが、無表情に心拍数を告げていた。

光りは、半分死んだようなあたしに、あの子のことを話してくれた。その間中、薄く開けた眼を、あたしは彼に向けていた。何度か頷こうとしたのに、どれも失敗に終わってしまった。

シルヴァの遺体は見つからなかった。

頑丈な装甲はばらばらになっていて……、でも、とうとう彼は見

つからなかったらしい。

トッドは連邦捜査局に引き渡された。まだ決定ではないけれど、おそらく命はないだろう。

しかし、シルヴァの生死やトッドの処遇などは、もうどうでもいいことだった。この小さな戦争は、あたしにとって、きつと超弩級のヒステリイだったから。

自分の中でこつこつと積み重なった負債が大音響で爆発したのだ、と今ではわかる。そのはけ口がシルヴァになっただけのこと。

一つの試練を乗り越えて、あたしは大きくなった。張り詰めていた心の殻から抜け出し、余裕が生まれた。精神の湖面は今や穏やかに澄み、その底にある望みをあたしは見つめる。

あたしの願い——それは、光りを助けたい、ということだ。この命に代えても彼の体を健やかなものにしたい。だから、この先キツイことが沢山あっても、あたしはこの仕事を辞めない。だって、この気持ちはあたしの生きる理由そのものだから。

あたしは、日の差し込んだ窓を見ている。目を細めて、心を空にし、日の光りを感じていた。

足音が、聞こえる。それが光りのものだと、あたしにはわかる。防音は完璧なはずなのに、耳の奥で響く。

彼はロビーを通り、エレベータで昇って、廊下を歩く。

部屋の前でタグを見せて、ドアを開ける。

ドアが、開いた。

あたしは、首を曲げ、はつきりと目を開いて、光りが入ってくるのを見た。

少しは元気そうに見えたのか、光りは嬉しそうに笑った。サイドテーブルの花瓶に向かい、彼は花を入れ替える。

その細っこい指。

すっと伸びた背中。

花を生ける、動き。

全てが優しく、美しい。
たまらなく、愛おしい。

光りは部屋の隅に行って、入れ替えた花をダストシュートに入
ていく。

言いたいが、沢山あった。

動かない体をたきつけて、あたしは口を震わせる。

「……光り」

何とかそれだけ、言えた。

光りがぱつと振り向き、静かに微笑む。

あたしは、「最後の狙撃、最高に素敵だった」と、続けたかった。

「あなたを、救いたい」と叫びたかった。

なのに、声は震えただけで……。

光りが近づいてくる。あたしの傍に座り、体を傾け、あたしに耳
を寄せる。

途端に、あたしは息ができなくなって、体が固まって、何も
できなくなった。

横目で見たパネルの表示が、跳ね上がっている。

火照った顔で俯いて、一拍。

あたしは視線を戻し、不思議そうにしている光りに、微笑んだ。

「橙。＼The Sun」 “mercenary・1” fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0757i/>

橙。 ~ The Sun ~

2010年10月11日23時52分発行